

目次

手記 追悼 池田晶子に捧ぐ～ある統合失調者の手記～

シェヒナー

追悼 池田晶子に捧ぐ～ある統合失調者の手記～

池田晶子とは現代日本の新進気鋭の本物の哲学者であつた人である。その池田晶子と統合失調症の自分がどう関係あるのか、それをおいおい語ってゆこうというのがこの話の目論見である。

自分はどんな人生の出来事にも原点となるものが必ずあると思っている。もちろん最初の原点は自分がこの世に生まれてきたということだ。その後、人はちょうどパチンコ玉が釘にあたっているいろいろな進路を取るように様々な出会いや出来事によって個性的な人生行路を歩んでいくことになる。

最近、統合失調症では、当事者の「語り」を通じた、ライフヒストリーの研究がおこなわれているらしい。自分はこれを結果論だし後知恵だという面があるにしろ、実際に自分は入院歴があり、通院中であることから統合失調者としての自覚をもって試みてみようと思う。

自分はごく普通の家庭に生まれた。格別に貧乏ということもなく、それほど裕福でもない家庭である。遺伝的には父も母も健康でとりわけ親類に病気の者はいない。今の自分と同じく精神科の薬を飲みながら働いている従兄弟が一人あるが彼の仕事は数学なので、これは脳の使いすぎである一種の職業病だろう。

とにかく1968年12月1日にごくささやかな命の誕生があつたのである。

中学校までは特に語ることは何もない。成績は優秀けどちょっと悪戯好きな活発な子だった。写真などではいつも真ん中に写っているタイプである。ただし時代的には複雑な時代で、テレビでは金八先生などがはやっており、いわゆるつっぱり全盛の荒れた学生時代だった。しかし自分に関しては言わばパチンコ玉は先ずまっすぐに飛んで行ったわけである。

高校時代になって最初の「釘」に直面する。市内一の進学校で担任側の言い分からすれば素行不良ということで退学させられたのである。もちろん私には私の言い分がある。しかしそれを言ってみても何も始まらない。今はただ、教師といえども普通の人間であることに気付いたにすぎないとしか言えない。しかしこのとき初めて自分は人生というものについて考えてみた。なぜ学校に行って勉強しなければならないのだろう、そもそも根本的な問題について意識が働いた。池田晶子には14歳に向けた哲学の書があるが、自分の哲学癖の原点は15歳であつた。

それから自分は人生を逆算した。つまり最終的な職業から考え直したのである。自分がやりたいし向いていると思える仕事は映画監督だ。将来は映画監督になろう、そう考えた自分は映画監督を養成する大学があるかないかを調べ、日大の芸術学部というものがあることを知った。そしてそこに入るためだけに高校へいった。一年留年して規模を市から区へ転じ、区内一の進学校に入りなおした。高校ではバンドばかりをやった。また文化委員長として文化祭をとりしきったりしながらも、成績はブービー、つまりビリから二番目であつた。しかし本当のビリは不登校児だったので、実質、私は学校で一番成績の悪い生徒であつたのである。自分はバイク乗りのパンクロッカーだった。不安は何も感じていなかった。今おもえば、自分の青少年期は軽い躁病状態だったのかも知れない。大学受験は

失敗した、しかし合格発表の時に正門前で配られていた、につかつ芸術学院のチラシをもらって、他にも映画監督になれる道のあることを知って、迷わずそこに入学した。大学のほうは映画監督になるんだったらフランス文学ぐらいは知っておいたほうがよいだろうと思ひ、慶応大学の通信教育課程の文学部に並行入学した。自分は何かあたりまえのことであるかのように上京した。

(高校時代の自分の奇矯な行いと言え、刺激を求めてなにか未知のものに遭遇したく、夜間に懐中電灯をもって地元の山にたびたび登山したことである。夜の山頂は何か神聖な感じがした。)

高校の卒業式が終わると、ただちに東京へ向かった。今、思えば何か前のめりで慌ただしい行動であるが、それが若さというものなのかも知れない。高校時代によく利用していた古着屋の馴染みの店員が先に東京へ行ったばかりだったので、彼女の家に駆け込んで、バイト先と自分の住まいが決まるまで、居候させてもらった。

家は、につかつの学校のすぐ近くがみつかったが、バイト先はなかなか決まらなかった。結局、スポーツ紙の求人欄でみるような、ここで公表するにはいかがわしすぎるバイトをすることになった。が、しかしおかげで金銭に困ることはなかった。

だけれども人生はなかなか計画通りにいくものではない。いかがわしいバイトからくる自分はこれで良いのか？という思いと、映画に関する飽き、また通信教育で初めて出会った哲学という学問の魅力、スクーリングで受けた深刻な環境問題に関する科学、それらの思いが少しずつ自分を変えていった。中でも一番深刻だったのは、自分はこれでよいのか？という思いである。どうせ苦勞するならもっとましな苦勞があるのではないかと自分はそう考えるようになった。また他方、生来からの躁状態での誇大妄想から、自分には映画以上のことが出来る！そういう感覚も内側から湧いてくるのであった。

自分はここでも人生を逆算した、いつかは死んでしまう人生だ。どうせ何かにチャレンジするならたとえ失敗しても後悔しないような大きな目標を立てよう！それには全人類が相手である、環境破壊、哲学、・・・

・・・『環境問題の哲学』！これこそが自分のライフワークにふさわしい仕事である！結果的にはいかがわしいバイトが、自分の第二の原点を生み出すことになり、自分はパソコン関係のバイトに切り替え、大学院を目指して働きながら勉強を続けた。自分は猛勉強した！これは今でも何か勉強していないと落ち着かないという体質となって残っている。

しかし今思えば、このとき自分はもう統合失調症を発病していたのかもしれない。統合失調症がもっとも発病しやすい年齢、十代後半から二十代前半の時期であった。しかし当時の自分だったら、たとえ狂っていると指摘されても、プラトンの一語をもってかえしたことだろう。曰く、「偉大なるものは、すべて狂気から生まれる」と。

だが結局は大学院はあきらめざるをえなかった。自分は語学ができないからである。哲学の天分があるという自負はあったが、入試と金銭問題という点で、自分には明らかに不利であった。それに加えてもし大学院の哲学科に入ったとしても、そもそも現代哲学自体がこの高度情報化時代に哲学として社会に影響を与えるという役割を終えているような、現代思想の末期的状況があった。自分が成功するには哲学一般を救済しなくてはならない。いわゆる哲学の復権である。自分は焦っていた。

しかし今から冷静に過去を振り返ってみると、私の発病の第一かつ主たる原因はこのことではなかった。精神的ストレスというのはストレスがストレスを生んでいくように重なって起こるものだ。わたしの発病の主たる原因は、以外に小さな日常の出来事からやってきた。第二の高校1年生の時から付き合いがあり、その後、恋仲になった彼女が浮気をしたのである。これだけならまだよかった。私は彼女の浮気が原因で他の女性を好きになり、三角関係に発展したのである。ユングの研究者、秋山さと子によれば、勉強ばかりする学生はよくこういった問題にとらわれるそうだが、私の場合もまさにそうだった。

私はもちろん、彼女たちを愛していた。たとえ形は違っても、それぞれに対する愛は本物であった。私はこのとき、毎日24時間のパニックに陥っていたのである。この状況は私に何かせずにはおられない葛藤をもたらし、私は職をやめて二人に対して、同じ内容の幼少のころからはじまる自伝的なラブレターを送った。彼女たちは一人は大阪、一人は九州だったので簡単に会って話をするということはできなかった。私は睡眠をとり、起きてはワープロに向かい、また睡眠をとり、起きてはワープロに向かうという生活をしばらく続けた。電話も随分した。ただ九州の彼女は自分から電話をしてくることは絶対になかった。私は東京から九州までは随分と遠いと感じていたので何とかもっと西へ行ける方法はないかと考えていた。大学は通信教育なのでどこに転居しても大丈夫だし、もっと西へ住めば彼女たちと会えるのにと考えていた。

ところがこうした状態は突然に終わった。九州の彼女が上司と不倫をしていると告白してきたのである。そして湯布院のほうに転勤すると言ってきた。私は九州の彼女とは失恋し、のこされたのは10年来の付き合いのある大阪の彼女だけになった。大学のほうも丁度卒業所要単位を修得し終え、卒業論文を残すのみとなっていたので、私は卒業論文で勝負するために、大阪の彼女に生活を見てもらおうということになり、大阪に転居し論文に専念する道を選択した。しかし九州の彼女を失ったことで私は鬱になり、ほとんど精神分裂病状態であった。私は自分の救済のために自律訓練法やユング心理学、ロジャースの論理療法、森田療法、フロイトの精神分析などいろいろな心理学の書物を読み始めた。催眠療法にも手を出し、ヨーガや気功などもやった。

そして大阪に転居することになったため、引っ越し資金をためるため私は自給の高い警備員の仕事をした。これまでの文章で私は友人にはほとんどふれることがなかったが、私は友達には常に恵まれていたとあっていいだろう。この職場でも阪大を中退してきたという友達ができ、楽しく仕事ができた。新明治座の落成式に皇太子殿下がお見えになり、自分が警備の代表としてお車を車庫から出すしごとを任せられ、ごく至近距離で敬礼をしながら車を見送ったことは日本人として誇らしく思えた。だが、その時、同僚から明治座の女性社員から中西さんあてに電話が入っていたと聞かされた時は、ちょっとがっかりした。上司が皇太子さまが来られてる時にいらん電話をつなぐなといって怒られたらしい。でもそれを知らせてくれたので、それはそれで嬉しいことであった。自分は本来ならば女性に人気があるほうであった。だがだからこそ失恋は痛手だったのだが。これが東京暮らしの最後の思い出である。

その姿見えざる運命よ、汝は我をどこへ導く。

大阪に越してから、自分の心に最初に刻んだ思いは「貧乏に耐えるはやすし、裕福に耐えるは難し」という言葉であった。貧乏な時には気も引き締まるが、裕福になると、自分はふやけてしまうのではないかという恐れがあったからである。

九州の彼女のことも頭をはなれなかった。私は自分を癒すために、自律訓練法や自己催眠をやってみた。学派ではユング派のものを好んで読み。頭ではどうにもならない苦しみの救いを深層心理学から得ようとしたのである。アパートから近くよく散歩に言った大阪四天王寺の人生相談もうけてみた。私はこの頃よく歩いたが、その時の自分としてはカントの散歩や、古代ギリシアの逍遙学派をまねしているつもりだったが、精神科にかかっている今から考えると、それはほとんど徘徊であった。私は歩きながら思いついたことを記録するために、小型の録音機をつねに携帯しており、歩きながら録音機にいろんな思いを吹き込んで記録したものだった。時には大阪の天王寺から神戸のポートタワーまで歩いたこともある。大阪の彼女はおおらかな心の持ち主で、私が何をしようとも全く、干渉しようとはしなかった。私はこのころ24時間を自由に使えたが、(仕事の終わった彼女を駅まで迎えに行くことは別にして)それはほとんど心理学に傾注することに費やされた。寝れば寝たで私は夢を記録し夢分析などもやってみた。

また同時に心理学、とくにユング心理学と宗教との垣根は非常に低く、宗教書などもちょとばかりかじったりしていた。そうした折、彼女の誕生日に彼女は東京出張となり、私も久しぶりに東京へついていくことにした。この時、私は日中の時間をつぶすために井の頭公園で読書をしているとご婦人に声をかけられ、言われるままについて行って、教会でキリスト教の洗礼をうけた。井の頭公園の隣の神社には日本人の著名な超能力研究者がおり、わたしはそこを来訪するためにでかけたのであった。ちなみに声をかけられた時、読んでいた書物は、ヒンズー教の『バガヴァットギーター』であった。

私は聖書を読んでみたが、キリストおよび死者が復活するということがどうしても信じられなかった。それで、私は後に顧みると大きな失敗をやってしまった。キリスト教を宗教としては考えずに心理学的に解釈してしまったのである。つまりこういうことだ、ソクラテスの弟子たちが冷静に、ソクラテスの復活を述べ伝えずにその教えを広めたのに対し、イエスの弟子たちはそのあまりの熱情からイエスの復活を述べ伝えてしまったのであろうと考えたのである。つまりここが哲学と宗教の違いであり、かつてある賢者に「不合理なるが故にわれ信ず」と言わしめたキリスト教の迫力に思い至らなかったのである。そもそも私は科学哲学から始めたのに対し、この頃は宗教哲学にまでその関心が及ぶようになっていた。

そんなとりとめのない日常を過ごしている間も、卒論を完成させなければならないという焦りはだんだん強くなってきた。構想は学際的な大規模なものであった、そもそもそんな構想を一片の論文にまとめるなどともともと無理な話ではあったが、なぜか自分にはやらなくてはならないという強い思いがあった。そう強迫的なほどに。

そもそも大学の哲学の卒業論文とは、「誰々の哲学の何とかという概念について」などといった一隅を照らすような小さな仕事をする場である。そこにいきなり何の専門家でもない自分が大思想家もどきの学際的なテーマを打ち立てるなどというのはまさに狂気のさたである。それは自分も重々承知であった。そんなおり、私は書店で偶然に所属する大学のOBによる小さいながら学際的な研究をする研究会の書物をみつけた。そこにはテレビに

もよく出る毎日新聞の政治部の部長や、いまは経済学者であるジャーナリスト、社会哲学の新進気鋭の若手哲学者、経済学部教授の四人のメンバーが集っていた。私は卒論の草稿を慌ただしく書いて、卒業論文指導にその研究会を希望した。この研究会の研究に自分は核となる哲学を与えることができる。そう考えたのである。

そうこうするうちに突然の大地震とともに年が明けた。阪神大震災である。私にとっても本格的に発病した記憶に残る年、1995年である。わたしは当時大阪に住んでいて、自分のアパートも揺れるには揺れたが、神戸はすさまじい状態だった。当時彼女と、誰かホームステイみたいにしてこの家に呼ぼうかと相談したが、特に知り合いがなかったので、その話は取りやめになり、私はテレビにくぎ付けになっている状態から、自分を引き離し自分の使命に没頭した。

しかしそうする間もなくオウム真理教事件が起こり私は再びテレビに引き戻された。

当時私は、考え事ばかりしていてほとんどテレビを見ない暮らしをしていたのであったがそれがワイドショーにへばりついているかのような生活に一変してしまったのである。

そうこうするうちに時間だけが過ぎていったが、ただそれでも卒論の草稿だけは大学に提出した。8月末の卒業論文指導にむけて、取り急ぎ草稿だけは送り出せたのである。その草稿の序文は次のようなものである。

古来、人類はさまざまな問いを発してきた。そしてまた人類だけが問うのである。人は何故、何故と問うのだろうか。人類というものを考える為に、人類の問いの歴史を問おう。

我々の祖先、太古の人類が言葉の獲得によって発した最初の問いとは、いったい何だっただろう。今日に生きる我々には、ただ想像することしか残されていない。

しかし、やがて、我々の祖先は文字を発明した。これによって歴史が始まって以来、この発明は我々に、様々な先人の問いを保存してくれることにもなった。数千年たった今日でも、それによって我々は、先人の様々な問いを知ることができる。

さまざまな文明の神話は、世界創造の起源とその行く末、人間の起源とその運命の行く末を語る。神話は大地の果てには何があるのかを教えてくれた。人間はどうして死なねばならないのかを教えてくれた。今沈んだ太陽は明日もまた昇るか？死んだ人間はどうなるのか？その他、様々な疑問の全てに、神話はいつでも答えてくれた。これら神話の語ること全ては、みな祖先の発した問いへの答えとなるものであった。もちろん、果たして我々の祖先が、これらの問いを自覚的に、問いとして発したものであるかどうかについてはわからない。問いというよりも、むしろ漠然とした、なかば無意識的な疑問や不安であったのだろう。だが、この太古の祖先の素朴な問いの感情は、その素朴さのゆえに根本的な人間の問いであったともいえる。そしてまた答えとしての神話もそうであった。

我々は、祖先の問いを知ることによって、何を知るだろうか。あのいつでも答えてくれた神話からは、今日の我々は、もはや受け取ることはできない。神話は、祖先に何を与えたのだろうか。祖先が神話から受け取ったものは、何であったろうか。我々が、もはや神話から受け取ることができないのは、神話の答えが荒唐無稽だからである。神話はいつでも答えてくれたが、その答えは大地を支える大亀であったり、地面の下にある死者の国であったりする。祖先は大亀を知りたかったのだろうか、地下の国を知りたかったのだろうか、きっとそうではないだろう。祖先が本当に知りたかったこと、祖先の問うたこと、祖先の欲した答えは、我々自身を取り巻く自然と、我々自身の運命に、統一された説明を与

えてくれる世界観であったと言えるだろう。祖先が問いを通じて欲したものは世界観であり、その答えが答えとしてさえあれば、きっとどのような説明でも、そこから受け取ることができたものなのだろう。

だがしかし、月日がたち、我々の祖先は、結局そこにとどまることはなかった。我々の祖先を神話にとどまらせることなく、そこからさらにつき動かした力、その力が、今日の我々の文明水準に、人類を到達させた力なのである。我々は、更に先人の問いの歴史が何であったかを問おう、先人が答えとしての神話を更に問うたように。

文明は発達を続け、人々の精神もより高度に発達した。人々は神話が説明する素朴な世界観に対して、認知的不協和を感じるようになった。神話には納得できない。何かがおかしい。神話は真実なのか？本当に亀が大地を支えているのか？ここに人々は、より自覚的な問いを発することになるのである。単なる問いに対する答えという図式を超えて、さらにその答えが真実であるかを問うようになった。ここにより一段高いメタ性をもった、問いに対する答え、すなわち単なる答えではなく、真理としての答えが求められることになったのである。

我々自身を取り巻く自然に対して真理を問うことは、すなわち事実を問うことであった。他方、また、神話によって語られていた、我々自身の運命と生き方を自覚的に問うことは、幸福と善、すなわち生きる指標としての倫理を問うことであった。

自然に対する問いは、日々の生活に必要な技術と結びついていたため、さらに自覚的な性質を要する人間自身への問いよりいっそう早く展開され、それゆえにまた獲得された知識も豊富であった。神話による自然観から事実による知識、すなわち自然知への移行は、古代文明における技術的知識の一定の集積に準備されて、よりすみやかに行われた。技術はもともと哲学に先行して存在し、知識もまたそうである。反省として意識化を伴う哲学は、後にくるものだからである。一定の技術的知識の存立基盤は、まだ明確な形で自覚されていない、なかば無意識の試行錯誤のうちにあり、その試行錯誤の過程はまた、漠然とした問いと答えの、認知的不協和の解決の過程である。この経験による技術的知識が、自覚的な自然に対する問いに発展しない間は、まだかなりの期間、神話的自然観と両立することが出来た。しかし人々は、日常生活の場面での知識が増えるにしたがって、長いあいだ安定した世界観を与えていた神話に対して疑念を持ち、真理としての世界観を求め始めた。本当の世界を問い始めたのである。

人類のこうした問いは、奇しくもほぼ同時代において、それぞれの地において古代文明が衰退したあと、爆発的な展開をみた。ギリシアではターレスからソフィストに至る議論の展開を生み、インドではウパニシャッドの哲人たちを生み、中国では諸子百家の文字通りの百花繚乱をみた。彼らは互いに相手の説明が真か偽かをめぐって、すなわち真理を求めて議論を戦わせたのである。この時期に我々の世界観を構成する最初の二つの問い、すなわち自然に対する問いと、我々自身人間に対する問いは、それぞれの地における多様な問い方をうけて、おそらくその可能な方向性のすべてを示したものであると思われる。そしてやがてその中から、それぞれの文明圏において優勢となった個性を集約するような、ソクラテース、ブッダ、孔子といった人物が現れはじめた。この三人はそれぞれの文明圏において、従来神話によっていた世界観をそれぞれ、「ロゴス」、「ダルマ」、「仁、或いは老子のタオ」といった、それぞれに個性的な差異のある概念ではあるが、いずれも具体的感覚的な物語を超えた、メタレベルの概念の下に、特にその後者の問い、すなわち人間自身に対する問いを正面から自覚した人物である。この人間の問いに対して、意識的な自覚を獲得した時代において、人類の無意識的な神話から、意識的な自立への過程が、その決定的な一歩を地に記したのである。

この一歩は、実に偉大な勇気ある一歩であった。無意識的な神話の世界は、確かに安定した世界観を人類に与えていた。しかし我々の祖先は、その無意識的な安定に背を向けて不安定で困難な過程ではあっても、意識的自覚による真実の世界観を自ら構築する道に、その第一歩を踏み出したのである。我々人類は、問いによってその足を持ち上げ、答えに

よってその足で地を踏み、また休むことなくして次の足を上げた。いったい誰が、これを樂園追放と呼ぶのだろう。人類は自らその存在とその可能性への挑戦に、その勇気ある一歩を踏み出し、今日まで、自ら積極的にその道を歩んできたのである。ここに自然を問うことは、対象としての自然そのものに問うことになり、人間のとしての生き方を問うことは、また、人間どうして議論することとなった。人類は自覚と意志をもった。

神話は古代文明の生活様式と分かち難く結びついていて、いわば、その文明の精神的世観の表明でもあったのである。その文明が衰退するとき、その神話も衰退した。ここに世観の一つの機能、すなわち共同体の規範としての神話、そのイデオロギー的拘束もまたゆるんだのである。ここには今日の生物学という分子進化の中立説とよく似た現象をみることができる。神話の持つ一つの機能、淘汰圧が外れたのである。

一般に歴史を考察すると、世観（自然の根本原理と生き方の根本原理）は安定している限り、その世観を共有している共同体に安心感を与えているのであって、それはその社会においては、最大の精神的財産なのである。しかしこの世観を拡張するためには、それを先ず問わなければならない。そして意識的に世観を問う行動は、無意識的にその世観に安住している人々の目には、危険なものに映る。なぜならば、安心感の根拠を問うことは、必然的に不安を伴うからである。このゆえに、安定している世観が確立しているときには、意識的に問いをもたらし個人には、周囲から抑圧がかかる。そして、世観が崩壊しつつあることを、人々が無意識的にも感じているような状態で、その抑圧反応は最大になる。しかし、この状態は相関的なものであるので、世観が揺らぐときには、個人の意識的問いも、また活性化される。どちらが引き金となって、これが起こるかは更にミクロな相関の初期値に依存するカオス的狀況だろう。また更に、この安定した世観と意識的問いの間には、フィードバックの機能があるのであって、新たな問いによって獲得された新たな認識は、また新しい世観となる。ソクラテースは神に対する不敬罪によって毒杯をあおぎ*、中国では焚書坑儒がおこなわれた。またこれに類する出来事は世界中の至る所で、大きな事件から小さな事件まで、様々な歴史の上で様々に起こっており、いまもまたどこかで起こっているだろう。しかし、ソクラテースはその後の西洋の世観の形成に大きな影響を及ぼし、東洋における儒教もまたそうであった。その後も我々人類は、この世観形成のダイナミクスの下に、自然の根本原理と、人間の生き方の根本原理を求めて、今日まで歩みを続けてきたのである。

その後の今日までの歴史の歩みを考察してみよう。考察もまた内的に問い、また内的に答えることである。

一旦踏み出した人類の問いは、状況と対象に応じて、更に精密な細分化された問いを發するようになった。問いは答えをもたらし、その答えは更に次なる問いの前提となった。

また、問いはあらゆる対象をとることができるため、既に答えとして与えられている前提に向かうこともあった。こうして人類は、その場で与えられている世観、すなわち常識を足場としてその常識の基礎を問い、またそうして得られた知識の応用によって、常識を再構築するということを、今日まで繰り返してきた。

こうした問いの細分化は、知識や議論の精密度を高めたが、それとともに、本来、人間にとって一つであった世観の機能の分化をもたらしした。今日、自然の根本原理を問う、科学の分野におけるそれはパラダイムと言われ、また人間の生き方の根本原理を問う、倫理、政治の分野においては、イデオロギーと言われる。

パラダイムもイデオロギーもそれぞれの両分野において、当面のものの見方や問い方の前提となる認識の枠組み、或いは足場を提供しているのであって、その共通認識を集団に与える機能は世観の機能であり、その時点において人類の最大の精神的財産なのである。

しかし、この構造を自覚していないが為に、あらゆる方面において、保守と革新の不毛な対立が起こり、また今日でも後を断たない。よってここに言及しておきたいことがある。

保守、それは世観を守るものであり、人類の財産を守るものである。革新、それは世

界観を拡張しようとするものであり、人類の財産を増そうとするものである。保守も革新も大切なものは同じなのであり、それは、より広く、より安定した世界観である。ともに世界観として、よりよいものを志向する人類共通の営みなのであり、世界観を否定する志向などありようもない。しかし、たぶんにして保守は革新を不安定とみなし、革新は保守を狭きとみなす。たとえ自覚的な意識がないにしても、およそ意志を持って生きようとする者なら誰でも、科学者も、技術者も、政治家も、芸術家も、宗教家もスポーツ選手も、企業人も、また家庭の母親にいたるまで、すべての人間は、人類のその存在とその可能性に対する挑戦としての表現を担っているものであり、その志向した領域を通じて、より広い安定した世界観の獲得と、より広く安定した行動の拡張を得ようとしているのであって、人類として同じ志向のもとに、共にささえあって生きているのである。安定と拡張は両極のいずれかに固執しない限り、両立すべきものであるし、またさせるよう努力すべきものである。ましてや当然、対立させるべきようなものではない。また保守と革新という視点に限らず、相互に対立する、意見、正義、真理、の主張においても、事態は全く同様である。

私が生まれた国、日本で最初にできた憲法の第一条は、次のようなものであった。

「第一条、おたがいの心が和らいで協力することが尊いのであって、むやみに反抗することのないようにせよ。それが根本的態度でなければならぬ。ところが人にはそれぞれ党派心があり、大局を見通している者は少ない。だから主君や父に従わず、あるいは近隣の人々と争いを起こすようになる。しかしながら、人々が上も下も和らぎ睦まじく話し合いができるならば、ことがらはおのずから道理にかなひ、何ごとも成しとげられないことはない。」

604年のことであり、今から1390年前に先人が我々に残した言葉である。だがしかし、それでもなお、そのわずか40年後に、彼、聖徳太子の一族も、やはりまた同様に、対立する勢力から絶滅させられたことが伝えられている。

そしてまた今世紀に至っては、個人に対して有無を言わさぬ、人類全体を巻き込んだ信じ難い、人類史最大規模の悲劇が起った。その世界大戦という歴史的圧力の下に、心を歪められた気の毒な世代が、今もなお、まだ心の傷を癒すことができずにいる。

我々人類は、いつまでもこうでなくてはならないのだろうか。そんなことはないはずである。我々はあきらめる必要はない、よく見れば我々のすぐ手もとに、既に新しい鍵が握られていることに気がつくはずである。新しい鍵とは、子供心のもつ柔軟さであり、柔軟さとは、暖かい包容力と健全なユーモア、すなわち遊び心である。

肩ひじを張って、正義を主張しあうことから、いったい何かが生まれるものだろうか。人の心にはそれぞれ信条があるが、その優劣を決めるに足る絶対的な真理や正義の基準があるだろうか。利益に至っては言及するまでもない。真に価値あるものは正義ではない、誠実さと友愛の感情である。互いに相手に対する誠実ささえあれば、人類に不可能な合意などないだろう。人間社会は、時にそれが対立の場面であったとしても、敵を友としての人生の悲喜劇のゲームを、共に味わう舞台なのである。フェアプレイの精神こそが、本当の意味での、賞賛すべき正義なのである。そしてゲームは、共に生き、共に死にゆく、同じ人類の一員の名のもとに、ノーサイドで終わらなければならない。そのようであってこそ初めて、好敵手との競争や健全な野心もまた、楽しいゲームとなるのである。

権威や権力もまた、常に実用上の存在であるのみであり、これに恐れや憧れを投影する感情は、なかば無意識的な未熟な精神である。神話の時代は意識的自立によって克服され酋長の時代も意識的自立によって克服される。権力や権威に、恐れや憧れを投影することこそ、反省の敵、すなわち盲目的な依存心や圧政的独裁の発生源なのである。意識的自立を獲得した個人相互による、協調、協力、対話、によってつくられ、誠実さに裏付けられた、実用上の便宜である権威、権力が価値ある正義である。そのときにこそ、権威や権力もまた健全なものになる。

パラダイムの転換・成立は、新たな事実の確認によってなされ、イデオロギーの転換・成立は、新たな合意の確認によってなされる。またこの事実の確認と合意の確認は、ともに主体間相互の共通認識に吸収されて、初めて成立するものであり、世界観として、また真理として同じ重みをもつ。そして合意を形成するときに何よりも必要なものは、先ずお互いに相手に対する誠実さを持つことである。そのことが即、最大の正義であり、最大の利益である。我々は、より柔軟でありながら、より完全なものを目指す、動的構造をもった、科学のパラダイムと政治・倫理のイデオロギーによる世界観を構築すべきである。それらは柔軟性と動的構造をもった健全なものでありさえすれば、決して必要悪でも、ましては否定的なものでもない。それらをなくして我々の精神が持つべきものはないのである。また世界観の健全さをはかる指標としては、それがいかに自己の暫定的な前提を自覚しているかどうかにかかっていると言えるだろう。自己を暫定的な真理とみなせる世界観だけが、健全な意識的な世界観なのである。

これに比して、無意識的な世界観は自己を絶対化する。我々は、絶対的な真理という概念を常に目指すべき到達目標であるとして、捉え直すべきであり、そのよって立つ暫定的な前提の意識化の程度、これをもって、真理に対する近似の程度とみなす様でなければならない。我々は真理に対する機能的な指標として、科学における実証という指標だけでなく、もっと適用度の広い、その真理のよって立つ前提の意識化という指標を、明確に確立すべきである。かつて我々の祖先が、無意識的な神話としてもっていた世界観の機能を、そのよって立つ前提の自覚された意識的な世界観によって、再構築するのである。我々は決して一次元的な直線の上で、その前方にのみ前進を続けているのではなく、三次元空間において、あらゆる方向に拡大しているのである。我々は自分の足元をも、問いを発することによって、更に拡張しなくてはならない。

以上は、人類の問いがどの様に発展して、今日の科学的知識や、政治あるいは宗教に至ったかの考察の素書きである。

さて、ひるがえって今日、西歴 1994 年現在、我々はそれぞれの専門分野で、目のくらむ程の高みに達した、詳細な科学的知識をもっている。しかし、それらの知識は我々に、世界観として機能しているだろうか。また、冷戦構造の終局とともに、対立的だった東西のイデオロギーも消滅した。しかし、我々のもとに何らかの新しい世界観が示されているだろうか。太古には神話は民衆の共通財産として、誰にも親しい世界観であった。しかし、それから数千年、または数万年たち、今また新しい世紀を前にしている我々は、人類の共通財産として、全ての人に語りかけるような生きた世界観をもっているだろうか。我々と呼ぶのを、ここでやめよう。私は今、世界観をもっていないのだから。果たして、これは進歩のやむをえない結果なのだろうか、或はこれが進歩なのか。確かに今日の科学的知識は、高度に専門化されたものであり、その詳細には私が立ち入ることは極度に難しい。しかも科学者の間でさえ、わずかに領域が違えば、その最先端の認識については、意志の疎通は簡単ではないという。私は、わずかにその技術科されたものを目前にして、その匂いのかぐことができるだけである。また政治についても、私が果たして、合意するにたる正義があるだろうか、そのなかでまた、私一個人の生きる指標をみいだすことができるだろうか。

以下の試みは、諸科学の対象ではなく、諸科学に共通な思考の方法を考察することによって、自然の根本原理がいかにして獲得されていくのかを問い、また合意可能な倫理について考察し、人間の根本原理をいかにして獲得していくべきかを問う、世界観形成の試みである。だがしかし、それを必要としているのは私自身であり、これは全く私の個人的な世界観形成への試みである。私が世界を知りたく、また、私の人生の指標を得たいからである。私は私の世界観を構築するために、どこまでも私一人の道を行かねばならない。とらわれのない自由な世界観を獲得するためには先ず、世界から自由になり、そして自分自身から自由にならなければならないからである。世界観獲得の試みは、同時に自分自身と世界を克服することへの挑戦でもある。これが私の、この世に生まれて死ぬまでにやって

おきたい、自分の存在とその可能性への挑戦である。今、私にとっては哲学が真剣な道楽である。人生は楽しくなければならぬ。そしてできれば、未来の人類へ、贈り物にできるように仕上げたいものだ。私の存在もまた、有名無名の無数の先人達の、悲喜こもごもの人生の大河に負っているのだから。

(※ソークラテースは神に対する不敬罪で毒杯をあおったのではない。青年たちを惑わしているという罪で起訴されたのである。私の間違いである。)

私はこの序論が与えるインパクトに関して絶大なる自信をもっていた。私は何らかの反響を心待ちにして卒業論文指導の日に備えていた。

そんなおり、卒業論文指導の直前、八月十五日の毎日新聞の夕刊に次のような記事があった。(読者の方々はもし自分が私の立場であったらどう感じるかを察して下さい。)

「国務大臣」と記帳したこい」と語った。

近事片々

「戦後五十年」が多く語られ、また語り続けられる。が、この五十年だけが語られたわけではない。無文字時代の記憶から始まり、歴史時代のさまざまな証言や証拠を総動員して「戦後五十年」をテーマに、みんなが今日の自分たちを語り、耳を傾け合ったのである。

◇ その「作品」は一つの戦後史の大きな事件だ！

物語ではない。いろいろな解釈を許すものである。各人が自分を語る過程で修正をし再編成をし、自作品に確信を強めたことだ。が、物語はどれも完結しない。多くの証言と証拠の山として語り継がれていく。

◇ こうした語り口の特徴は何も新しいものではない。みんなが毎日やっていることだ。が、テーマをみんなが論じる――

<玉音放送> 8月15日朝、反乱未遂の

まったくの孤

立無援であった私には一条の光がさした思いがした。この記事を書いた記者は“おそらくは”私の序論を読んだ人物だ！わたしにはそう思えた。なぜなら当時、私の知る限り“無文字時代”などを取り上げているマスコミはどこにも見当たらなかったからだ。文脈からしてみても“無文字時代”というのは唐突だ。(私の序論にふれたのでなければ)

しかし、丁度このころから、わたしの近辺には異常な出来事が出来しはじめた。(あるいは“私が”異常になったのである。) まず、無言電話がやたらとかかるようになり、身近に異様な気配が感じられるようになった。何か周囲に私を注視している者があるかのように感じられるようになってきた。この“気配”これを分かってくれる人はいるだろうか？そうまさに“気配”がするのである。(あるいはこれが注察妄想の始まりである) そしてついにテレビが私に向かって話しかけているような気がするまでにこの傾向は増長した。統合失調の発病である。仮にもし、私が感じていることが妄想ではなく、実際にテレビが私に向

って話しているとしたらどうなるだろう。

私に向って話しているとすれば、それにはテレビ電話のように相手方にも自分の姿が見えていなければならないはずである。そうするとどうなるだろう？私の部屋に隠しカメラや盗聴器があるとでもいうのだろうか？

孤立無援であった私には最初はこの注目が（妄想かもしれないが）ありがたかった。しかし隠しカメラとはいったいどういうことだろう。私はしばらくすると混乱し始めたが、まさかと思いつつもテレビを相手に会話するという奇妙な生活が始まった。私は孤独感を免れたことを喜びながらも、盗聴器や隠しカメラというあるべからざる手段につねに半分は怒っていた。（これが私の関係妄想のはじまりである。なぜなら十年以上たった現在でも隠しカメラ及び盗聴器などがあるという確証は得られていないからである。）

このようなことがあった後、私は卒業論文指導を受けるために再び上京した。時はオウム事件で騒がしい最中であった。私はオウム事件の騒ぎを尻目に、自分の前途に洋々たる希望をもって、キャンパスに入って行った。何しろマスコミまでが知っている私の序論である。あたたかな祝福が待っているであろうことを確信していた。

しかし、このとき待っていた“現実”はわたしをはげしく困惑させた。まるでそっけなく全く話の噛み合わない担当と単純な面接をして、その卒業論文指導は終わったのである。わたしは、愕然として毎日新聞社に出向き、例の研究グループの部長の所に行ってみた。しかし、やはり、彼も卒論指導の担当者と同じく、まったく素知らぬふりをしていたのである。

結果論だが、この時点で私は自分が病気であるということを判断すべきであった。しかし、わたしは何か狐につままれたような気分と激しい怒りをかかえて大阪へ帰ってきた。

私は自分が感じる直感や感情が妄想であるなどとはとても信じられなかった。テレビを見るとやはりテレビは自分に語りかけていた。私の理性は全くの混乱の内をкаろうじて暴挙に出ることなく、過ごさせていた。私の理性と感情は激しく葛藤した。実は私は今でも、隠しカメラや盗聴器があるのではないかと思うことがある。実際、あるんだと仄めかす友人も一人ある。

しかし、私はどう考えてもそれが妄想だとは考えられないのだ。私は今、精神障害者ホームヘルパー二級を持っているが、そのテキストには簡潔にこう書かれている。

妄想の初期には、患者本人と全く関係の無い周囲の人の動作や言葉、あるいは起こった出来事、事故について自分と関係づけ、「他人の素振りが自分をあてこすっている」「テレビや新聞で自分のしたことをほめかしており、皆に知られている」などと考える関係妄想が多くみられます。『精神障害者ホームヘルパー講習テキスト』P 43

これは全く私の症状のことでもある。しかし私にはそれが妄想だとは一練り返し言うが一本当に思えないのである。

私の頭で幾ら考えたとしても、私の頭は自分ひとりの頭でしかない。そこでここでは読者に判断してもらいたいのだ。本当に盗聴や盗撮は行われていないのだろうか？私は本当に統合失調者なのか？

しかし、ここで仮に、仮に、盗聴器や隠しカメラがあるとしてみよう。では、それで私は統合失調ではないことが確定するかというとしてそうではないから、話は複雑なのだ。

それはこういうことだ、イタリアの精神科医、思想家のルック・チオンピの『感情論理』は統合失調が発病するメカニズムとして、二重拘束というコミュニケーションのとり方をあげている。それは訳者がいうところでは「感情－認知的な板ばさみ」と訳したほうがよいだろうといわれているメカニズムであるが、『感情論理』ルック・チオンピから直接引用すると次のようなものである。

ある母親が分裂病の息子の面会にやってきた。病棟で、息子は親しみを込めて腕を母親の肩に廻そうとしたが、母親の方は、その息子の腕を払いのける。そうしながら、「お前は、もう私を愛してはいないの？」と尋ねるのであった。息子はわけがわからなくなってしまう。顔を赤らめていると、母親は「そんなにうろたえてはいけません。自分の気持ちに不安を持ってはいけません」と言うのであった。・・・(中略)・・・患者は、もうこれ以上母親と過ごせる状態ではなくなった。その後看護助手に掴みかかりたりして、ベッドに拘束されることになったのである。・・・(中略)

私はこの十二年間、隠しカメラや盗聴器があるかないかつねに人に尋ねてきた。各テレビ局や自民党本部などへも出向いてきた。しかしいずれも門前払いであった。しかしテレビを見ると相変わらず私に話しかけているのである。私の神経はこの十年間で擦り切れんばかりになってしまった。もし二重拘束の仕組みを知っているのならば仮に盗聴器や隠しカメラがあったとしても、病気にならないのではないかと、思う読者も居られるかもしれない。しかし、あなたはナイフで刺されれば痛いということがわかっているならば、実際刺されても痛くないだろうか？

とにかく私はその後、二年間の長きにわたって、非常なる違和感と混乱を抱えながらも、テレビが自分に語りかけているという目の前の“現実”(わたしにとっての)と向き合わざるおえなかった。(或いはそういった“妄想”から逃れられなかった。)

テレビに出てくるあらゆるタレント、ニュースキャスター、学者、政治家が私に向かって喋っているのである。私は一人で部屋にいるときそれを無視することができなかった。

これは私にとっては、論文よりも実践的な仕事であった。しかし環境問題という点では私の仕事は非常にまずかった。私はゴミの分別などをすることがなかったので、そういった点をテレビで放映されることは恥であった。しかしそういった混乱も二年間も経つと少しは冷静になれる、なぜならば、こうした異常な状況が二年間も放置されるということはあるにないことだと思うようになったからである。そこで、私は興信所に私の家に盗聴器や隠しカメラが本当に仕掛けられているかどうかの調査を依頼したのである。

結果はそういった機器は見受けられないというのが探偵社の回答であったが、感情的に強く隠しカメラを意識していた私にとっては、この興信所もグルになっているとしか感じられなかった。しかし、この興信所の回答によって本当に無いかもしれないと思った自分は、自分の状況に愕然とせざるおえなかった。私が狂っているという可能性もあるのではないだろうか、二年間たってわたしの理性はそういった可能性についても考えられるようになっていた。

私は自分を天才であると信じていたのに、実は単なるキチガイだった。この認識は私を愕然とさせた。慌てたわたしはこんな生活をしている場合ではない、先ず就職をしなくてはいい・・・私は職業安定所に急いだ。まさに論文の構想どころではなくなっていた。

それに二年間の混乱のなかで、私は学費を納めるのを怠ってしまい、退学処分となっていたのである。

私は慌てて、よく考えもせずに職業安定所の前で求人チラシを配っていた不動産屋に

就職した。ところがである、このとき私は素行までもおかしくなっていたのか、あるいは本当に盗聴器や隠しカメラで私の日常が一般に報道されていたのか、その不動産屋の人々とうまくコミュニケーションが取れなかったのである。私にはその不動産屋の社員のテンションがあまりに高すぎると感じていた、それに何かドッキリカメラで私の行動をテストするかのように正常ではない出来事が続いたのである。わたしはたちまち混乱して一週間も経たずにそこを退職した。次に私は大阪新世界のフェスティバルゲートに新しく出来たたこ焼屋でバイトをすることにした。しかしまた、他のバイトたちのテンションが異常に高いのである。私はここでも混乱からうまくコミュニケーションがとれず、半年近くでやめざるおえなかった。この頃から私は周囲の人間がいぶかしく思え、いわば、波長が違う世界を生きていた。私は家に帰ると、隠しカメラがあるような生活をし、外ではそんなものは無いような行動をとっていた。いわば精神のみならず行動までが分裂していたのである。ただ、たこ焼き屋のバイトの女の子がわたしに「おっさん、なんも知らんでええで」と囁いたことだけは記憶に残っている。・・・私は“おっさん”なのか？世間は酒鬼薔薇事件でさわがしい最中だった・・・。

そうした生活をしているなかで、私は一緒に暮らしている彼女に、何か隠していることはないか？と執拗に問いただすようになっていた。もちろん隠しカメラ、盗聴器のことである。私は率直に盗聴器や、隠しカメラがあるだろうとは聞けなかった。そのころの私には万が一自分は狂っているのではなかろうかという恐怖感があつたのである。彼女は孤独であつた自分とは違って、会社勤めできちんとした社会生活を営んでいたのも、もし私の私生活が報道されていたとしたら、きっと知っているに違いないと思ったからだ。しかし、彼女は何の事を聞かれているのかもわからないような返事しかなかった。私はもし彼女が知らないうちに、自分だけのみならず彼女のプライバシーをも侵している存在があるのなら、それは許すべからざることだと思った。それはともかく彼女は私の異変にもまったく気づいていないようだった。

そうこうするうちに、その年もまた盆を迎えるため私と彼女はそれぞれの実家に帰省した。実家の両親はわたしの異変に敏感に気が付き、ついに私は精神科に通ってみることにした。病院に通うと最初“非定形精神病”と言われ自分は気が動転した。わたしは本当にキチガイだったのだ！！盗聴器はなかったのだ！！にも関わらず、私はテレビや道端ですれ違う人の会話が私のことを言っていると感じる習慣から逃れられずにいた。もう何年もそう感じながら生きてきたのである。急に気にするなと言われてもどくだい無理な注文であつた。私の場合、症状が完全に習慣化されてしまっていた。

私は自分が置かれている状況に愕然とした。学歴なし、職なし、また大阪の彼女とも離れてしまった。私は就職を焦った、とりあえず生計だけでも何とかして、彼女を取り戻さなくては、私は百科事典の営業などをしたが長続きしなかった。売上の成績が悪いからである。とりあえず大阪に戻りたい、そういう気持ちから、私は大阪に職場のある先物取引の電話営業をみつけ、ようやく、大阪に戻れたのは1999年であつた。しかしその職場の様子がまたおかしいのである。一件の客も取らずに半年も給料をもらっていたのである。私はテレビを見ないようにしていたが、なぜかテレビの出演者に申し訳ないような気がしていた。大阪で半年、薬を飲みながら頑張っていたが気分障害で再発した。この頃私は完全に狂っていた。会社で稼いだ給料もその貯金もすべてプラモデルやらわけの分からない

工作に費やしてしまい私は毎日プラモデル屋に足しげく通っていた。当時の私は、何とかしてさまざまな材料を用いて大真面目に宇宙を表現しようとしていたのである。彼女は狂人のかつべー（私は彼女からかつべーと呼ばれていた）も好き！とってくれたが、私は自分では何も狂っていないと思っていた。しかしそうして私が創造主の気分を味わっているうちに、彼女の方でも諦めがついたのか、実家へ帰るよう言われて九州の実家で静養することになった。

帰ってきた当初は私は躁状態だった。毎日わけの分からないものを作っては宇宙を創ったような気分、そう最高の気分、創造者の気分を味わっていた。子供用のガチャガチャを宇宙船形のレーザービームが出るものを目的に、借金までして店中をガチャガチャだらけにしたこともある。貯金箱から毎日 500 円を失敬して、毎朝ゲームセンターへ向かい 500 円分を使い切ると家に帰ってくるという生活が続いた。自分でもわけが分からず地元の山の山頂に方角を図って地球がプリントされた三色のビー玉を埋め込んできたり、鉄塔に登って頂上にキューピーちゃんの人形をアロンアルファでくっつけて帰って来たりした。それは私にとっては（神＝私）の誕生の瞬間であった。

しかし親に言われて病院へも通っていたので、薬が効いてきたのか私にもふと“我に返る”瞬間がおとずれた。私は真実に私は狂っていたことに気づいたのである。私は死にたかった。哲学も彼女も仕事も何も残っていなかった。ただ残ったガラクタのすべてが私のこれまでの人生はすべて間違いの連続に過ぎなかったのだと証していた。

私は深刻な鬱になったが、両親と共に暮らしていたため、死ぬこともできなかった。丸一年以上、外へ出るのはタバコを買いに行くだけ、後は食事のほかに何もせずずっと布団のなかで時計を見ながら時間を消化するという生活が続いた。この時、私ははじめて死後の世界というものに興味を覚え、古今東西のあらゆる霊界ものを取り寄せて読んでみた。それまで哲学一辺倒であった私は、初めてスピリチュアリズム、ニューエイジなどの精神世界と呼ばれるジャンルがあることに気づいた。それらの世界はそれぞれバラバラでありながらも何か共通のメッセージも持ち合わせていた。すなわち神の存在である。それは私には少なからず希望であった。しかし私は 2001 年になるまで布団から出られなかった。私は病床の中で二十一世紀を迎えたのであった。

この頃は、精神世界に対する知識が増えた一方、妄想もそれに応じるかのように激しくなっていた。10 年ぶりに北九州に帰ってきた自分は、実は自分の両親は殺されていて、よく似た二人が僕の両親を演じているのではないかと疑っていた。そのほかあらゆる宗教団体が自分を敵視していて、罠にはめようと工作しているだとか、CIA や公安調査庁が自分をターゲットにしているだとか、さまざまな妄想に囚われていた。

とにかく、全てを失ったどころか、統合失調という障害まで負ってしまった自分は、何とか人並の生活をしなければならないと思い、年明け早々求人誌を買って、教材付きの英会話教室の営業をすることにした。

しかし営業はうまくはかどらず、成績不振であった自分は三ヶ月で辞めざるおえなかった。このときの訪問営業中に、偶然中学の同級生にあって、彼はあの頭のよかった中西が英会話教室の営業なんかしているのか？と聞いて、天才か精神病かどっちかになるだろうと思っていたと言っていた。そして、「とにかくお前死ぬなよ！」という言葉が最後だった

が、後から思うとただ歩いているところを見られただけで、死にそうなほど弱って見えたのかとおもうと、ちょっとおかしかった。

その後もいくつかの営業の仕事をしたが、成績不振でどれも長続きしなかった。不採用になった面接も数知れず、自分はこれまで感じたことのない劣等感にさいなまれ、自分はこの世の屑だと思った。それに妄想に苦しめられることも多かった。統合失調症の付随症状である鬱的な状態もますますひどくなった。

『人の心は病苦をも忍ぶ、しかし心の痛むときは、だれがそれに耐ええようか。』

箴言 18-14

大阪の彼女とはだんだん連絡がとれなくなっていっていった。自分はすべてを失っても彼女だけは失うまいと心にきめて、何とか再び関西で仕事ができる状態になることを目標とした。

営業はすべて駄目だったので、工場の作業的な仕事を選び、全国展開の工場派遣の会社から、とりあえず淡路島の携帯電話の組み立てのライン作業の職についた。しかしここでも自分は務まらず、二週間ともたずに辞職した。九州の実家に帰る前に、引っ越した彼女の新しいマンションを訪ね、本と手紙をポストに入れて帰った。彼女には会えなかった。

このときは、今度こそ本当に死にたいと思った。数知れぬ会社に履歴書を送って、面接をうけたが不採用の連続であり不採用の通知を見ることが私の日常と化していた。

かろうじて私を思いとどまらせたのは、両親の存在と精神世界系の知識のおかげだった。この世のことだけを信じて、死後の世界や輪廻転生、天国地獄や復活などを考えなければわたしは決定的な敗北者であり、生きている意味や価値などを全く持っていないと思えた。このころよくマンションの最上階に昇ってみたりもしたものである。

ただしいくら感情的に鬱だとしても、本当に死のうと思えば理性が働いてくる。今、あわてて死ななくても、人間は生きている限り死なぬ者はないから、死は誰にでも平等に“もれなく”待っていてくれるわけである。そうであるならば、自然に死ぬまでは生きていてもよいのではないか。そう考えられるわけである。自分は死を見つめた結果、逆に生きていようと思うようになった。(ちなみに池田晶子も今ここに死があるからこそ、今ここに生もあるんだと書いていた・・・彼女は死後どうなったのだろう。あるいは無になった可能性も考えられるが・・・)

とにかく生きよう。そう思った。以前の自分はソクラテスなどを読み、ただ生きるよりも、“善く生きる”こと、魂の世話をすることこそ肝要であるなどと考えていたが、どんな風にでもいい、ただ生きるためだけに生きよう。“ただ生きよう”そう思うようになった。

『話を突然、現在に戻すがこの苦しみの時は自分にとって一生の財産となる極めて重要な時期であった。後に詳細を述べるが結論からいうと自分が神を信じられるようになったのはこのときの体験があったからである。

主よ、あなたはみ言葉にしたがって
しもべをよくあしらわれました。
わたしに良い判断と知識とを教えてください。
わたしはあなたの戒めを信じるからです。
わたしは苦しまない前には迷いました。
しかし今はみ言葉を守ります。
あなたは善にして善を行われます。
あなたの定めをわたしに教えてください。

高ぶる者は偽りをもって
わたしをことごとくおおいます。
しかしわたしは心をつくして
あなたのさとしを守ります。
彼らの心は肥え太って脂肪のようです。
しかしわたしはあなたのおきてを喜びます。
苦しみにあったことは、わたしに良い事です。
これによってわたしはあなたのおきてを
学ぶことができました。
あなたの口のおきては、わたしのためには
幾千の金銀貨幣にもまさるのです。

詩篇 119-65

自分はもともと科学哲学から出発したのであって、意識して神の存在を否定するようなことはなかったが、ごく自然に無神論者であって神という“概念”は人の想像力が作り出したものにすぎないと考えていた。特に論文を書き始めた当初は、神を信じるくらいなら精神病患者にでもなる方が、よほど理性的であるというような考え方の持ち主であった。

ところがどうだ、実際に統合失調を抱え、精神病患者になってみると、精神病患者であるよりは神を信じて、神にすがって生きる方がずっとすばらしいことであることに気がついた。つまり神の存在を確信している今となつては、自分は精神病になるべくしてなったのであったことに気づいた。目的はもちろん神を知るためである。』

こうして 2002 年は暮れて行つたが、わたしにとっては、両親以外のすべてを失い仕事には就けずそのことで非常に焦りながらも読書は続き、ほとんどの領域を読み漁った精神世界系の書物から、だんだんと聖書一筋になって神にすがって内面の支えを得、また書物だけの精神世界の世界から、インターネットを通じて巡り合った実際に精神世界系の活動をしている人々と巡り合い、自分も一緒に活動するようになった。

しかし、未だ自分の妄想からは逃れられずにテレビを見るたびにマスコミが自分に何かを伝えようとしていると感じていた。実際、9.11 テロやイラク戦争ほか、雑多な事件もすべて自分に向けてマスコミが何かを伝えるためにでっち上げたフィクションの事件であると思っていた。私にはまだそれが妄想だと断定できる自我が戻らずに現実を妄想だと、或いは妄想を現実だと思っていた。実際わたしは何が現実で何が妄想か判断できない状態だった。そして実家が引越してから一年たち、通院する病院も家から近い病院へと変えた。

年があけても、私の生活にはなんら変わるところはなく、求人誌を買っては面接で落ち、また買ってはまた面接に落ちという生活を繰り返していた。わたしは求人誌を読むほかはただ、ただ、ひたすらベッドの中に潜り込んでいた。そんなおり、四月になって高校の時のクラスメイトから、ヘルパーをやってみないかという話が来た。彼は高校時代サッカー部でスポーツマンであったが、大学時代プールの監視員のバイトをしていた折、そのバイトの最終日ではしゃぎすぎてプールに飛び込んだところ首の骨を折り、頸椎損傷で車イス生活になってしまった友達だった。

自分はこの話を大変ありがたく思つてうけた。一日なにもすることがなく、外へ出るのは病院と煙草を買いに出かけるだけ、人と話すこともほとんどないという状況からは一刻もはやく抜け出したかった。どんなわずかな変化でもその変化はありがたいことであった。彼とは高校時代にはそれほど親しくはなかったが、大学時代、彼が首の骨を折って車イス

生活になってからは、家に引きこもってどこへも出かけなくなっている。という話を又聞きしたとき自分はショックのあまり東京から急遽、見舞いに行きいろいろと話をし、それからは文通をしていたのだった。今でも連絡のある高校時代の友人は彼だけである。彼も頸椎損傷になった当時は、施設に入れられて、死にたいと思っていたというので彼とは死についての話題も普通の感覚で話し合うことができた。それまで一人だった自分は彼と接することによって障害者には障害者の世界というものがあることにだんだんと気づくようになってきた。

ちょうど頃合いを同じくして、精神障害者ではない、いわゆる一般に精神世界と言われる分野の活動をしている人ともインターネットを通じて知り合いになり、自分はヒプノセラピーをするようにもなった。ヒプノセラピーとは催眠状態から前世の記憶を引き出したり、現在のライフテーマ、また真の自己、ハイアーセルフからのメッセージを受け取ったりする遊びの一種である。(遊びと言っても、それを真剣そのもので追い求める人たちもある) 成功率はだいたい6, 7割で、あるご婦人はインドで焼き物を焼く仕事をしている時のことを詳細に話してくれた。周りで伝染病で人が沢山死んでいくのを目の当たりにしながら、自分が看病している人が亡くなったときのことをビジョンでみて突然に涙し始めた。

当時は自分は男性であったということである。また他には、途方もない話に思われるかもしれないが、地球以外の惑星での生活を催眠下で語ってくれた人もある。まさに精神世界は何でもありの世界である。しかしちょっとばかり科学的な訓練を受けた自分としては、当時の肉体もさらに脳も消滅しているのに、いったい何が転生するのだろうと疑問を感じてしまう。それで自分なりに調べてみたところ、脳は物理学的に隠光子で情報を保存しているのではないかという脳量子理論をあたってみたが、その隠れ光子が転生可能であるものかどうかは私にはわからない。しかし、現実には催眠下では過去生の記憶を話し始める人もあるのである。

またここで断っておかなければならないのは、私は死後の世界や輪廻転生が存在することの確証をえたとか、それを証明したとか主張しているわけでもない。確かに催眠下でそれらの話を聞くことができたし、また日常生活のなかでもそれらの話を聞くことができた。

わたしがまだ生命保険の営業をやっていた頃、お客さんの家で親戚が亡くなったとき、死の直前にすでに他界している親戚の方々が来られているからお茶とお菓子を出しなさいと言ってなくなられたお年寄りの話や、ヘルパー二級の資格を取ったとき、講師の先生がヘルパーをしていた頃、自分の利用者であるお年寄りが夢枕に立って、今まで世話をしてくれてありがとうと言って去っていった。その翌日、亡くなられたという連絡が入った話しだとか、入院病棟で、親父が死んだ時、同時間にタクシーで家に帰ってきてそのまま姿を消していったんだ。という話などその他書物で知りえたことを述べれば枚挙にいとまが無い。わたしはこれらの話を信じないわけではないのだが、つまりこれらのことはわたしにとってはすべて他人の経験でしかないのだ。また、ヒプノセラピーでもインドで焼き物師をしていたというご婦人に対してもその時の王様の名前は分かりますか？と尋ねたところ分からないと答えられた。見ずして信ずる者は幸いなりとはキリストの言葉であるが、半面わたしはカーテシアン(デカルト主義者)であって、わたしが証明と言う時は数学的な証明を理想としており、少なくとも物理学的な実験による検証の要求を満たすことを持って証明されたものと考えているのだ。わたしが真実を探求する時には必ず方法的懷疑をもってするのがわたしの常である。

しかしながら、わたしはこれらのことや神の存在を確証したり、証明したりすることは出来ないが、それをわたしは“信じて”いる。そしてまた、何故それらのことが証明されないのかという疑問にもわたしはわたしなりの答えを持っている。

聖書からの引用であるが、旧約聖書続編のエズラ記（ラテン語）にはこういう記述がある。これは天使とエズラの問答記である。

・・・前略・・・ 4するとわたしのもとに使わされたウリエルという天使が答えた。「あなたの心は、この世のことに、すっかりうろたえている。それでもあなたは、いと高き方の道を理解したいと思っているのか。」わたしは、「はい、わが主よ」と答えた。すると天使はわたしに言った。「あなたに三つの道を示し、三つのたとえを提示するためにわたしは遣わされた。あなたがもし、この中の一つでも解き明かしたなら、わたしも、あなたが見たいというその道を示し、よこしまな心とは何のこともかを教えよう。」

そこでわたしは言った。「わが主よ、おっしゃってください。」すると天使はわたしに言った。「行って、炎の重さを量り、吹く風の大きさを計り、あるいは過ぎ去った日を取り戻して来なさい。」わたしは言った。「人の世に生を受けた者のうち、いったいだれにそのようなことができるでしょう。」そこで天使は言った。「もしわたしが海の底にはどれだけの住まいがあるか、地下の海の源にはいくつの流れがあるか、大空の上には幾つの流れがあるか、あるいは樂園の出口はどれか、といったことを尋ねたならば、恐らくあなたは言ったであろう。『わたしは今まで、地下の海に下ったことも、陰府に降りたことも、天に昇ったことも一度もない』と。だから今、わたしは、火と風とあなたが過ごした日々についてだけ、それなしには片ときもいられないものに限って尋ねたのである。しかしあなたはこれについて何も答えられなかった。」そして天使は言った。「あなたは、生涯自分にかかわりをもつ事柄さえ知ることが出来ないのだ。それなのにどうしてあなたの力量で、いと高き方の道を理解できよう。腐敗した世にさえ恐れおののく者が、どうして不滅なものを理解することができようか。」

これを聞いたとき、わたしは地上に伏して、言った。「この世に生まれて神を恐れぬ人々の中に住み、苦しみを味わい、しかもこの苦しみが何なのか分からずにいるよりは、むしろ生まれてこなかった方がよかったです。」すると天使は言った。「わたしは、野の森の中に分け入ったことがあった。そのとき、木々ははかりごとをめぐらして、言った。『さあ、行って海と戦いを交え、海を我々の前から退かせて、別の森を作ろうではないか。』ところが、海の波も同様にはかりごとをめぐらして、言った。『さあ、上って行って、野の森に戦いを挑み、そこを我々の領分にしよう』と。しかし、森のはかりごとは失敗した。火事になって森は焼け尽くされたからである。また、海の波のはかりごとにも同様に失敗した。砂が隆起し、海を阻んだからである。ところで、もしあなたが両者を裁くとすれば、どちらを正しいとし、どちらを罪に定めるだろうか。」わたしは言った。「どちらのはかりごとともむなしいことです。森には陸が与えられ、海には波を運ぶ場所がそれぞれ与えられているのですから。」そこで天使は言った。「その判断は正しい。ではどうして、あなた自身について同じように判断しないのか。陸が森に与えられ、海が波に与えられているように、地上に住む者は地上のことだけを理解し、天上界の者は、天上界のことを理解するのである。」

わたしはこの文章を読んで悟った。死後の世界や輪廻転生があるにしろ、ないにしろ、今、この地上で生きているからには、地上のことを行うことが人生なのであるということ。

（今、この原稿を書いている中、次に当時の病状のことを書こうとして、主治医にカルテの開示をお願いしたところ、今の主治医は平成十七年からの担当で、十五年（2003）のカルテは他の医師が書いているものだった。この頃はわたしの病識の記憶も混乱しており、

病院に通った記憶も当時の担当医の記憶もほとんどないありさまである。ただ漠然と覚えているのは薬を飲んでいただけであるが、わたしはとにかく盗聴器や隠しカメラはやっぱりあると考えていて、薬をできるだけ避けようとしていたし、病院にも全く重きを置いていなかった。それはある教派神道系の宗教団体の本に書かれていた、「医学は本来は偉学にてあるべきを異学とさえなさしめり、汝ら薬、薬とありがたがりて、蟻が砂糖にたかるとくなれど、ゆきすぎなば、霊力、身力、失われざらん」という言葉が心にうかぶからであった。しかし、現在では聖書を読むようになり、薬に対する態度もそのころとは全く違う態度である。ちなみに聖書では旧約聖書続編の『シラ書〔集会の書〕 38』にこうある。

医者こそその仕事のゆえに敬え。主が医者をつくられたのだから。いやしの業はいと高き方から授かり、それによって、王からは褒美を受ける。医者はその博識によって高い身分を与えられ、権勢のある人々の前で驚嘆される。主は大地から薬を造られた。分別あるひとは薬を軽んじたりはしない。一本の木によって水が甘くなり、木に備わる力が、明らかにされたではないか。主は自ら人々にいやしの知識を授け、その驚嘆すべき業のゆえにあがめられる。医者は薬によって人をいやし、痛みを取り除く。薬屋は薬を調合する。主の技は決して終わることなく、健康は主から全地の人々に与えられる。子よ、病気になったら放置せず、主に祈れ、そうすれば、主は治してくださる。過ちを犯すな。手を汚すな。あらゆる罪から心を清めよ。良い香りの献げ物と、質の良い小麦粉を供え物として献げよ。余裕のあるかぎり十分に、供え物に油を注げ、その上で、医者にも助けを求めよ。主が医者をつくられたのだから。彼を去らせるな。お前には彼が必要なのだ。医者の手によって病気が治る時もある。医者もまた主に祈り求めているのだ。病人の苦しみを和らげ、命を永らえさせる治療に成功することを。創造者に対して罪を犯す者は病気になって医者にかかるがよい。

わたしは以前、新薬の臨床試験の被験者をしていたことがある。薬にはプラセボ効果ということがある。実際は薬ではない小麦粉の塊を薬といって被験者に飲ませて、実際の薬を飲ませた被験者との違いを検証するのである。その時に、薬と偽って飲ませられた被験者もそれを薬だと思って飲めば、実際の薬と同じ効果をあらわすことがある。これは一種の暗示であり、効かない薬を飲んでも効く場合があるということだ。ではその暗示効果が逆の方向に働けばどうなるだろう。つまり絶対、薬は効かないと信じている人に効く薬を与えても効かないことがあるのだ。わたしの結論では、薬に対する心理的対処法は実際に効く薬を、絶対に効くと“信じて”飲むことだ。これが薬に対しての一番正しい態度であろう。）

当時まだ私は、現実盗聴器や隠しカメラがあると思い、自分は病気ではないと考えたり、やはり盗聴器や隠しカメラはないのであり、自分は統合失調で妄想をいだいているのだと考えたりした。長い間このような二つの考えの間を、環境から受けるわずかな刺激によって行ったり来たりしていると、それだけでもいつかは、本当に病気にもなろうというものである。そして、なによりも実際に就職できないことから、自分は病人として生活する方がより自然な成り行きであるようにも思われてきたものだった。

またこの時分にたまたま高校の恩師から自分の話をきいた、スバルで車の営業をしている高校の旧友から、自分のところで働かないかというありがたい申し出があったが、自分は日産の車に乗っており、さすがに日産の車でスバルの営業をすることはできないし、車を買換える金もないので、友人の申し出を断ってしまった。あるいはこれが自分が普通

に就職できる最後のチャンスだったのかもしれない。

そんな折り、自分のホームページの掲示板に私と同じく精神障害者で、小規模作業所を営んでいるという人から、病院も近くなんで一度遊びに来ませんか？という書き込みがあった。わたしはとにかく日中なにもすることがなかったし、また同じ精神障害者の人達は日中どうしているのだろうという関心からその作業所に行ってみることにした。(友人宅のヘルパーは主に夜のしごとであった。)

これが私と“ウエンディ”との出会いであった。いま書いているこの原稿も“NPOウエンディ”の事業でそれぞれの体験談を本にしようというという企画から生まれているものである。

4年後の2007年現在初めて知らされたことだが、このウエンディとの出会いは私の妹が準備したことであった。現在結婚して神戸で暮らしている妹がインターネットで精神障害者の作業所やNPOなどを検索でしらべ、良さそうな所があったので、メールで「このような兄がおり、自分のホームページを持っていますので、そちらに連絡できますでしょうか？」と問い合わせたことが発端だったようである。なお妹はこのことは兄には知らせないでくださいとことわっておいたそう。

私は妹にも世話になったようだが、それにもまして両親にも助けられた。私の父は孤児で孤児院で育ったので、それから考えても言えることだが、もしわたしに健康な両親がいなかったら、今の私は存在しない。私は高校を退学した時も、高校時代バイクで夜遊びをしまくったときも、勝手な夢を持って上京した時も、そしてまた精神障害者として帰郷した時も、ひとかたならぬ心配を両親にかけている。そして障害年金も貰えず、十分な収入のない現在も、両親のもとで生活しているのだ。聖書には放蕩息子の例えが記述されているが、わたしこそまさに放蕩息子の典型である。

主治医にカルテの開示をお願いした時に、主治医に「実はですね……」と聞いて聞かされたことであるが、自分が薬を拒否して、病院にもいなくなるとき、両親は主治医を訪ねて、自分の様子を見た上でどうしても薬を飲まないし病院へもいかないというので、薬をこっそり食事に混ぜて取らせるようにしていたとのことである。このとき主治医はわたしに詳しくははっきりとお話しますので、一度病院へ来られるように言ってください。と何度も私を説得する方法を提案したらしいが、両親はそのたびに悲しそうな顔をして無理ですから……と聞いて食事に薬を混ぜる方法を選択したそうである。こんな時などの両親の悲しみには想像にあまりあるものがある。

二週間後の診察日のあと、わたしは自分のカルテを手にしていて。わたしはカルテを一通り読んだあと、ため息をつかざるおえなかった。他人の目を通して自分を見ると言うのはなかなか味わえない体験ではある。しかし主治医のカルテを読んで、その時々診察の様子を思い出すことはあっても、短時間の内に数年分を通して読むと別のことにも気づくのである。わたしは“何も”変わっていなかった。そう最初の診察から最後の診察まで、わたしは同じようなことばかりを主治医に話している。

いや、わたしが変わっていないのは病気になって通院したときからばかりではなく、恐らくはいかがわしいバイトをしながらも猛勉強をした大学時代、あるいはバイクを乗り回していた高校生の時、いや成績優秀だった中学生の時、あるいは喧嘩っ早いが礼儀正しく元気一杯であった小学生のとき……とにかく私の物心ついたとき、わたしの性格が

出来上がった時から何も変わってはいないのではないか・・・そんな風に思えるのである。

実際のカルテには、盗聴器、隠しカメラ、定職につけない、躁鬱を繰り返す、時々多幸感を感じたり、発作的に不安になったりする・・・同じ内容のことをただ繰り返し違う言葉で語っているにすぎない自分が読み取られていた。

ウエンディは半年後に NPO になった。いや、なったと言うよりも自分たちが手作りで NPO 法人格を取得したのである。わたしはその NPO に在籍したまま、収入が少ないので、その NPO に作業を依頼していた蜂蜜屋の配達をした。また収入が少ないので、加えて朝刊配達をし、夜は週四日ヘルパーをした。またそうしたバラバラの収入をかき集めるのに嫌気がさして、ひとつの仕事だけに専念したいと思い、絨毯専門のクリーニング屋に就職して、他の一切の仕事をやめにしたが、クリーニング屋の経営状態がデタラメだったのでそれもやめざるおえなくなり、2006 年には秋口にすべてが破綻して、避難場所を求めて病院に一ヵ月半入院した。年末のクリスマス頃には来年の再起を期して退院し、派遣会社に登録を済ませ、年明けから工場その他に派遣社員として働き始めた。派遣先をいくつか変えた後、自分が暖めていた哲学の論文を形だけでも本にしたいと思い、印刷業もやっていたウエンディに印刷してもらった。その時、たまたま理事長がいて、利用者としてではなく、職員としてウエンディに就職しないかとの話をもらって 2007 年 4 月以降、作業所ウエンディ本部の副所長をしている。今、わたしの頭には大阪に越してきた頃、一発屋的にはやった、橘いずみの歌が浮かんでくる・・・♪ たったこれぼっちの生き様をひとりふりかえり～♪ 四の五の理屈を言ってる私を愛したい～♪。『失格』

今の私の日課はこうである。朝、5：30 頃、両親が起きるのにあわせて自分も起きる。ぐずぐずして 7：30 頃になると、車でウエンディに向かう。15：00 ウエンディの仕事が終わって帰宅する。帰宅するとすぐ自分の部屋のベッドの上に横たわり、眠る、17：00 にニュースを見る。夕食。またベッドに入り寝る。夜中の 1，2 時頃に目が醒めて数学及び物理の本を一節だけ読む。神の啓示を聞く人として有名なアイリーン・キャディの『心の扉を開く』のその日の箇所をミクシィの日記に書き込んで、日中携帯からでも読めるようにしておく、寝る前の薬、睡眠薬を飲んで、また寝る。5：30 ごろまた起床、自分の部屋のヤハウエのレリーフ及びキリストの十字架像に礼拝し、詩篇を唱える。両親におはようを言って父の部屋の神棚に礼拝し、仏壇で般若心経を唱える。朝食。

これだけである。病気であるということになると、とにかく自己中心的になりやすい、そして自己中心的な発想が高じるとなんやかんやの不満が出てきて、それだけ悩みも多くなる。それに気がつくとはやはり、世のため人のために生きなければならないと思うようになる。そうなれば自分の悩みなど消し飛んでしまうからだ。

私は闘病生活の中でいろいろと人間誰もが悩むようなことを、よりいっそう深刻に悩んできた。しかし、これは心理学の教科書の悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しくなるというテーゼの応用として私が、考えついたことだが、「人は悩みがあるから、悩むのではなく、悩むから悩みが出来るのである」というのが実際のところだとわたしは結論づけた。私は今、38 歳であり、もうまもなく不惑に達しようとしている。池田晶子氏には『41 歳からの哲学』と言う著書があるが、わたしは果たしてこれを読むだろうか・・・

そうじて私の到達したところは池田氏がすでに述べている場所にすぎない。池田氏の文章から直接引用しよう。

毎日たのしく生きるために

人生は短い。

と、どうしてもやはり思いますよね。平均寿命は 80 とは言われますが、歳をとってからできることは当然若い頃より制限されますし、ましてやその歳まで生きるかどうかの保証はどこにもないわけです。ひょっとしたら、明日、心臓発作で死ぬかもしれない。

縁起でもない。

と、普通はやはり思いますよね。しかし、よく考えてみると、いやよく考えるなどしなくても、生きている限り人が死ぬのは当たり前で、この当たり前を当たり前として認識しているかどうかで、人の人生観は全然違ったものになるようです。今のここに死はあるからこそ今のこの生はあるのだと思えば、人生は長いとか短いとか言いようもなくなるはずだからです。だって、いつだって、「この今」しかないのだから。

「この今」しかない気づけば、先のことをあれこれ悩んで苦しむことはなくなるようです。悩みや苦しみというのは、人生には先があるとする錯覚的時間認識が作り出す、まあ一種の気の迷いみたいなものでしょう。未来への不安、もしくは過去への後悔、いずれも時間認識の勘違いです。だって、未来や過去を悩んだり苦しんだりしているのは、まさしくこの現在ではないですか。

あ、なあんだ。

と、気がつけば、錯覚としての悩みや苦しみは脱落します。そして、なんらそういった感情は湧かなくなり、逆に楽しみや喜びといった感情が湧いてくるようになるようです。むろん、悩みや苦みのタネは変わらずに存在していますよね。我々は生身の存在だからです。仕事上の悩みが存在すれば、病いの苦しみだって存在する。それは偽りのない事実です。しかし、それらを言わば受け身で悩み苦しんでいるということではなくて、妙な言い方ですが、悩むことを楽しむとか、苦しむことを喜ぶとか、そんなふうに変えられるようです。要するに、楽しみや喜びというのは、どこか外にあるものではなくて、自分の側の心の構えのことだということです。それを楽しんでやろうという構えでいれば、それが何なのであれ、それはその人にとって楽しみとなるはずで、楽しむということは、今しか存在しないのだから、その今を楽しむということ以外ではないでしょう。

矛盾したことを言うようですが、それでもやっぱり時間というのは存在する。我々は生身の存在であって、肉体は刻々老いてゆく、以前できたことが今はもうできない、体の故障は不愉快だ。

昨今はアンチエイジングブームで、それら加齢に伴う現象を否定的に捉える向きがあるようですが、しかしこれはもったいないことのように思います。なぜなら、老いるという経験は、誰も初めてのことであるはずで、せっかくの未知なる体験を、否定してないものにしてしまうのは惜しい。死ぬとか病むとか老いるとか、当たり前のことを否定として捉えるから人は苦しむことになるのでしょう。やはり、当たり前を当たり前として捉え、なおそれを楽しむという構えが、ひょっとしたら人生の極意なのかもしれません。

まあこの人生、何のために生きるのかとは、生きている限り避けられない問いではありません。それは人間にとって最も根源的な問いであって、だからこそこんな問い、人に問うて答えが得られるものではない。根源的な問いほど、自ら問い自ら答える以外はありません。もしも本当に答えを得たいのであれば、生きている限り一度は必ず自らに問うてみるべきでしょう。

「私は、食べるために生きているのか、生きるために食べているのか」

さて、本当に楽しい人生は、どちらだと思いますか。

池田晶子 哲学者 1960－2007 二月二十三日、腎臓癌
『週間プレジデント』掲載

私は本当は何ものだろうか・・・私はひとつの魂である。そして今はウエンディの職員をしている、統合失調症の患者でもある。ヒプノセラピストとしては私は神の使いでもある。収入こそサラリーマンの平均月収の半分にもならないかもしれないが、私は十分に今の職で自分を表現している。

ウエンディは精神障害者の憩いの場所であり、そこではどんなことでも話題に出来る。

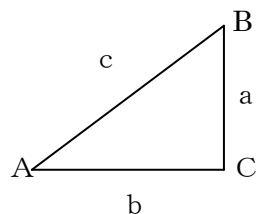
葉の話や病気の症状や自分の状態をみんなで知らせあって助け合っている。わたしは精神障害者の社会参加を支援する施設で働けることに誇りさえもっている。それに精神障害者といってもいろんな個性があり、物語をつくるのが得意な人、行政書士の資格を持っている人、音楽ができる人、横浜国立大や早稲田に行った人もある。また特に自分と親しくいつもお金に困っている事務局長のMさんなどは以前にスティーブン・ジョンソン症候群という病気で死にかかったとき、幽体離脱を体験しそこでおそらくは前世のビジョンをみたというのだ。その時かれは、ナチスドイツの占領下にあるフランスのどこかで、日本の旗とナチスの旗を店に掲げてうどん屋をしていたというのである。その当時も彼は日本人で、実際に自分が作っているうどんの匂いまで鮮明に覚えているということだ。(この件にかけては時代も近いため、どこかに記録が残っており、輪廻を実証できるかもしれない)わたしは、彼とほぼ毎週のように山口のザビエル教会にドライブもかねて祈りにいっている。こんな多様な人々が自分の個性を表現するために毎日集まっている。この間は所長にヒプノセラピーを施術して感動してもらった。またフェルマーの最終定理についての話などを数時間かけてやったりした。所長とは宇宙論の話などをすることもある。こんなことの出来る職場はさがそうとしてもほとんど見つからないだろう。そして来週は自分がプロのヒプノセラピストとしてスピリチュアルコンベンションに出店するというヒプノセラピーデビューを所長が受付を引き受けてくれることで支援してくれる。さらに、また今書いているこのような原稿を本にして出版もしてくれる。こんな多彩な仕事がある職場というのはおそらくウエンディしかないかもしれない。自分は感謝すべきである。

(フェルマーの最終定理に関する自分の意見は正しいと思われるので、特に下記に発表しておく。ただし、私はワイルズの難しい証明を理解した上で下記の主張をしているわけではないことを知っておいてほしい)

フェルマーの最終定理とは

$a^n + b^n = c^n$ に対して $n \geq 3$ を満たす自然数 a 、 b 、 c は存在しない。という定理である。

まずピタゴラスの定理を思い出してほしい三角形ABCを直角三角形とする



このとき $c^2 = a^2 + b^2$ である。

よって $c^3 > a^3 + b^3$

わかるだろうか？

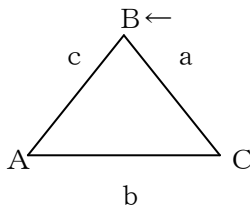
(面積 c^2) × (高さ c) は

(面積 a^2) × (高さ a) + (面積 b^2) × (高さ b)
より大きい

次に頂点 B を左にずらし二等辺三角形にする

$$\text{このとき } c^3 = a^3$$

$$\text{よって } c^3 < a^3 + b^3$$



この変形が連続であれば、 $c^3 > a^3 + b^3$ から $c^3 < a^3 + b^3$ への変化は連続であり、よってこの変化の中に $c^3 = a^3 + b^3$ なる点が存在するはずである。

いかななものだろうか？・・・・・・・・いかななものだろうか！

後は問題はその点が自然数であるということだけである。

これはスーパーコンピューターがないと計算できないのでわたしの手にはおえない。

だがそのような点が存在すれば、私はワイルズの主張と真っ向から衝突することになる。

否、ワイルズは否定されたことになる

私はやはり統合失調症で頭がいかれているのかもしれない。だがこのようにして、現在を常に楽しんで生きている。わたしは自分の人生すべてを肯定することが出来たのだ。

付録、『かつべー宇宙論』

私は次元というものを単なる数学的な計量測定手段とは考えずに実在だと考えている。われわれが生きている宇宙は四次元宇宙である。しかし時間という一次元を抜きにして空間だけを考えれば、我々を取り囲む空間は三次元空間である。だが三次元とは四次元の断面にすぎない。断面とはどういうことだろうか・・・テレビに映っているビデオ映像を考えてほしい。そこに映っているもの、動いている人や車、建っている建物、などを四次元世界とみなす。すると三次元とはなんだろうか、そのビデオを一旦停止して画像を止めてもらいたい、それが四次元の断面、すなわち三次元である。我々を取り巻く空間は三次元なので、この次元には二次元、一次元などの世界は厳密な意味では存在しない。しかし仮に紙の表面を二次元の近似とみなしてみよう。そしてそこに二次元人がいたとする。その二次元人の周りに鉛筆で丸を書いて二次元人を取り囲むともう二次元人は丸の外に出ることができない。同じく一次元人を考えてみよう。直線の両端から点を打って一次元人を挟んでしまえば一次元人はもうどちらへも進むことができず、じっとしているより他はない。しかし一次元人も二次元人もそれより一つ上の次元の存在から手をかけられればその牢獄から抜け出すことができる。一次元人は二次元人によって平面を横に動き、挟まれた二つの点から逃げ出すことができる。二次元人は上を飛び越すことによって丸から抜け出すことができる。このようにある次元の住民はそれより一つ上の次元の存在から手をかけられると、ワープすることができる。私の宇宙論はこの四次元宇宙は五次元宇宙の断面であろうというものである。ホーキングは宇宙の始まりの特異点においては、虚時間なるもう一次元が存在してるはずだと言っている。つまり五次元宇宙のなごりのようなものである。私はこれを正しいと感じる。しかし、この四次元宇宙と五次元宇宙の間に成り立つ関係は五次元宇宙と六次元宇宙にも成り立つだろう。数学的帰納法によってこの論理は無限次元の宇宙を指示している。私の勘によると超ひも理論は 11 次元までによる無限次元宇宙の近似であろう。この宇宙は四次元なので近似としては 11 次元で十分である。しかし完全な宇宙論は無限次元を必要とするので、それは不可能であり、なしえないことである。話は飛ぶが、私は神を信じている。神とは一つ上の次元の存在である。この四次元宇宙を統べる神は五次元の存在である。では無限次元を統べる大神とはいかなる存在であろうか？こうなってくるともはやそれは文学の話になってしまうだろう。

旧約聖書続編・知恵の書にはこうある。

「主よ、御前では全宇宙も計りをわずかに傾ける塵、朝早く地に降りる一滴の露にすぎない」

中西宇宙論・・・おしまい。

シェヒナー

—神の臨在—

中西克徳

ヤハウエ
יהוה —在ったもの、在るもの、
在るであろうもの、在らしめるもの—へ捧ぐ。

シェヒナー ―神の臨在―／目次

善の分析的定義	1
1. 認識の構造（脳－神経系を認識の主体と前提した場合）	
2. 感情と認識の構造	
3. 感情を加えた認識の全体的構造	
4. 結論	
5. 補遺・認識の確実性	
6. 解説	
美の詩	1 3
1. 帰郷	
2. 回顧	
3. 新世紀	
笑話―隠されたる神―	1 8
神の存在証明	1 9
FACE ONE'S MAKER ―後代へ―	2 0
あとがき（統合失調症からの回復）	2 1

シェヒナー

—神の臨在—

「見よ、主を畏れることは知恵であり
悪を避けることは悟りである。」

『ヨブ記』

善の分析的定義

1・認識の構造（脳－神経系を認識の主体と前提した場合）

認識はそれを獲得した方法によって構成される。

$(f(a) \mid \text{認識}) = \text{対象} * (a \mid \text{方法})$ *は演算子

例、 $(\text{認識} \mid \text{絵画}) = \text{対象} * (\text{方法} \mid \text{視覚} * \text{脳における情報処理})$

$(\text{認識} \mid \text{音楽}) = \text{対象} * (\text{方法} \mid \text{聴覚} * \text{脳における情報処理})$

$(\text{認識} \mid \text{事件X}) = \text{対象} * (\text{方法} \mid \text{マスコミ報道} * \text{視聴覚} * \text{脳})$

正確に言えば認識とそれを獲得した方法とは一体であり、認識とはその個別的方法によって得られた個別的認識の総合である。

$(\sum f(a) da \mid \text{認識}) = (f(a) \text{視覚情報} * da \text{視覚}) * (f(a) \text{聴覚情報} * da \text{聴覚}) \dots$

認識は記憶となって、記憶と新たな認識の結びつきにより、更に新たな認識を構成する。

例、音楽、帰納的判断による認識（経験知）

認識は感覚に依存度の高いより具体的なものと、判断に依存度の高いより抽象的なものがある。

例、感覚に依存度の高いもの－音楽

判断に依存度の高いもの－帰納的判断による認識（経験知）

正確に言えば認識の具体度と感覚依存度、抽象性と判断依存度は一体である。この感覚依存度と判断依存度は、主体の意識的操作の自由度によって分けられるが、それは自由の有無によって明確に区別されるものではなく、自由度の多少によって程度の差別が可能なのである。よって抽象と具体も断絶したものではなく、一つの連続である。

また認識を獲得する方法、この「方法」という言葉で表現されている概念内容を受動的なものにとらえて客観的に表現するなら、「機能」と言い換えてもよい。また逆にその概念にその主体を考え、能動的にとらえるなら「操作」と言い換えてもよい。

認識を獲得する方法として、感覚は受動的な機能であり、判断は能動的な操作である。

認識の抽象－具体度（判断－感覚依存度）による差別を認識の性質といい、認識の機能－操作性（受動－能動性）を認識の方法という。

（既に得られて存する認識の性質の違いを抽象具体度という観点でとらえ、認識を獲得する方法の違いを機能操作性という観点でとらえる。

以上の考察のもとに認識を

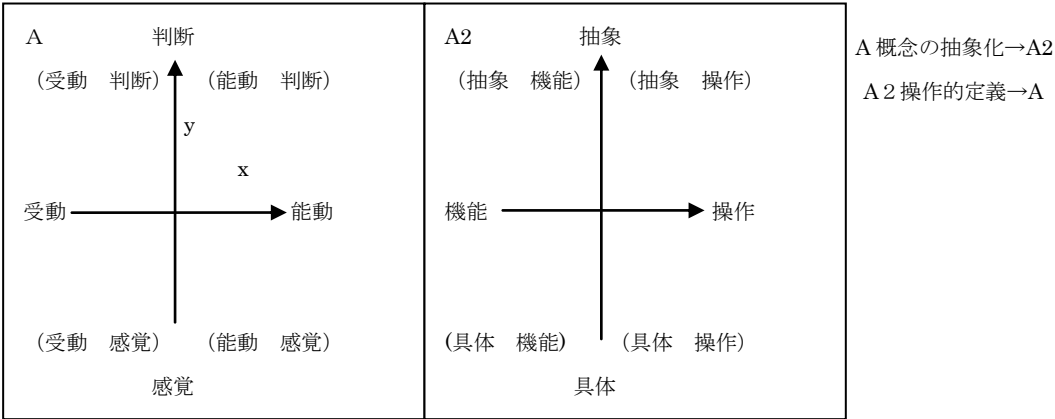
受動的な機能による具体的感覚としての認識 例、生理的認識

能動的な操作による抽象的判断としての認識 例、演繹的認識

受動的な機能による抽象的判断としての認識 例、帰納的認識

能動的な操作による具体的感覚としての認識 例、技術的認識
 の4種に大別して考えることができる。

いま仮に、性質Xと方法Yを座標軸とした認識の2次元空間を考える。



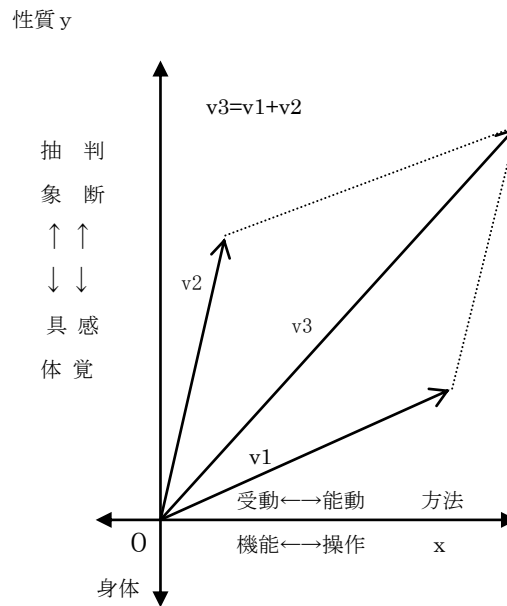
またこの空間を重ねて表現したものに、認識の集合の例を適用してみる。

古典物理学の認識		善悪の認識	
ヨハン・ケプラー 事実の整理 (惑星の位置の変化を数学で記述)	アイザック・ニュートン 事実の説明 (仮説の操作(演繹)による法則の抽出)	成文法 慣習法	倫理学 法哲学
ティコ・ブラーエ 事実の記述 (惑星の位置の記録)	? 事実の制作 (モデルの制作)	慣習法 経験的道德	宗教 神話 儀礼

個別的認識を上記の認識空間におけるベクトルとして扱うために、上記の空間に原点を導入し、座標軸の構成をかえる。

なお、原点の役割として厳密なものとは定義できないが、一応ここでは生理的な制限としての、全く受動的な感覚機能によるものを0とする。すなわち、生まれて間もない乳児が有する認識である。

また右のように、認識 V_1 と認識 V_2 の合成により、新たな認識 V_3 が形成される。心理学上、汎化と呼ばれる反応形式や類推と呼ばれる思考様式もこのように表現しうる。特定の成功した認識方法が、他の認識と合成されやすい傾向にあることは自然な傾向と思われる。



またこの認識空間は、単位ベクトルやスカラー倍などが定義できないため、数学的なベクトル空間ではなく一種の擬似空間である。他方、空間という呼称にも語弊がある。よって区別して認識世界と呼ぶ。

(認識世界の単位ベクトルとして、外的にゲシュタルトとして表れる、内的な神経生理学上の何らかのユニットが考えられるかもしれないが、おそらくその単位ユニット自体が多種存在し、終局的にニューロン一つをとるということになるという意味がなくなってしまうだろう。)

2・感情と認識の構造

前章の第一項で認識の構造について考察したが、それらは認識を獲得する方法や、その得られた認識の性質についての構造であった為、認識の思考的側面に限って考察した。しかし全体的な人間の判断や、その結果としての認識にはその感情的側面も含まれているのであり、この章ではその感情的側面も含めて、その相互の機能の有する内容の違いとその関係について、発生的見地から考察する。(すなわち、如何にして善という認識が形成されるにいたるか、及びその形成された仕方からの善の定義。つまり、善とは何か、までを射程に入れ、また、その一層抽象度の高いものとして、或いはまたより具体的なものとして、具体的感覚の対象としてもある美をのちに考察する。)

感情機能判断・思考機能判断の発生と認識（目的認識と手段認識）

意識としての明確な認識機能に先立ち、自身を含めた環境すべてを認識する、感覚認識機能がある。例、新生児が生得的に持っている生理的反射（呼吸・吸飲嚥下・瞬目・瞳孔反射・咳、等）と新生児反射（把握反射・足指反射・モロー反射、等）の成立条件。

感覚認識機能から徐々に分化された判断機能が成立してくる。例、新生児は出生後、未分化な興奮状態からしだいに快と不快の二極に分化された反応を示すようになる。

この徐々に分化される認識機能は先ず、自己の生存条件を良くするものか、悪くするものかを判断する機能を発達させる。この快不快、好き嫌いの判断（反応）は、言語以前の価値、意義における第一の判断となる。この判断をする機能を感情機能と呼ぶ。乳児における反応（区別、すなわち最初の判断）は感情の表出による快不快に対する反応である。

そして更に、対象の同定を認識する思考機能が発達してくるが、この機能は感情機能の判断を更に有効になさしめる為の正確さの役割を担う。この認識の同定を担う機能によって、自分と自分でないもの、自分にとって良くないものがしだいに明確に認識されてくる。

つまり、感情機能の最初の判断はそれは「どうか」であり、思考機能の最初の判断はそれは「何か」である。この二つの機能の結びつきによって、「それはどうであったか」が認識される。

要約、認識機能の上に判断機能が成立し、合成されて新たな相互不可分の機能を産出する。また、判断機能によって判断された情報も、新たな認識の対象として認識機能にフィードバックされる。これらの認識機能と、感情、思考の判断機能はその端緒である新生児におけるわずかな時間的誤差の後には、常に同時並行的に発達してゆき、最終的には明確には区分し難い有機的連関構造として機能するようになる。その結果が意識の機能でありその認識世界である。

上記で考察した、思考・感情の判断機能は当然その対象を持つが、この対象には先ずそれが人（人物）か物（事物）かの違いがある。この考察の背景としては、幼児の発達過程、原始的人類の発達史、或いは、痴呆性老人の認識能力の衰微の過程に関する研究や、また特にピアジェの発生的認識論からの示唆を得ている。

感情機能の対象が物であった場合、それは「どうか」の判断を経て、つまり快不快、好き嫌いの判断を経て、欲するか、欲せざるかの直接的欲求の対象として認識される。ここに感情機能によって価値（意義）づけられた、新たな認識の場において、自分にとって最初の価値が出現する。

認識機能へのフィードバックによって更に、感情機能が発達してくると、具体的な物を超えた、様々な抽象的価値を判断するようになる。すなわち、何に対して役立つ価値であるのか。この「何に対して」とは、価値の価値、つまり第二階の価値であり目的を意味する。まさしく、目的とは最終的に満足をもたらすものという意味で感情機能の産物である。またこの満足をもたらすものという判断から美醜の価値も生まれてくる。またこのようにして、それ自体、直接の目的ではない様々の道具がつくられる。

道具が感情機能によるものであるという意味は、道具はその目的という抽象的性質によって道具といわれるからである。例、コップは紙、ガラス、陶器等の材質によらず、その形態によらず、その大きさによらず、「飲み物を注いでそれを飲むことの目的に使用出来る機能」によってコップなのだからである。

また、当然、道具の創造は、感情機能の単独によるものではなく思考機能との連携によりなる。

思考機能の対象が物であった場合、先ずそれは「何か」の判断を経て認識された後、直接的操作の対象となる。これが更に思考機能によって洗練された操作方法を与えられたものとして道具となる。道具はそれ自身として創造されることもあるが、既にあるものに対し思考機能により使用方法が与えられたときも道具が創造されたとみなせる。

認識機能へのフィードバックによって更に思考機能が発達し、そのレベルが上がると、思考機能はその操作自体を対象として働くようになる。その操作自体とは、操作的思考とそれによる認識の相互作用生成物であり、操作に対する操作、つまり第二階の操作、抽象的操作である。例、幾何学、代数。

要約、思考機能が道具に使用方法を与えるのに対し、感情機能はその使用目的を与える。道具はこの二つの機能の連携によりなり、この二つの機能、使用方法と使用目的は、遊びとしての混沌のうちに、しだいに明確に結びつくようになり、やがて明確な使用方法と使用目的を持つ道具が創造される。

次に感情機能の対象が人であった場合、その人は「どうか」の判断を経て、つまり、快不快、好き嫌いの判断を経て認識され、直接的コミュニケーションの欲求対象となる。この事態の構造は対象が物であった場合と同様であるが、その場はコミュニケーションの場であり、価値の成立、意義付けもコミュニケーションを通じて相互的に成される。

これもまた認識機能のフィードバックによって発達してくると、コミュニケーションの場における抽象的な価値自体（行為、言明の意義）を判断するようになる。これも同じ様に、最終的には価値の価値、つまり第二階の価値すなわち目的を設定する機能を果たす。

また思考機能の対象が人であった場合、先ずその人は「誰か」の判断を経て認識された

後、直接的コミュニケーションの対象となる。

また更に、この思考機能のレベルが上がると、そのコミュニケーション自体を対象とするようになるが、コミュニケーション自体とはコミュニケーションにおける思考の表現と認識の相互作用生成物である。(例、言語)

つまり何かを言語化する(名づける)とは、コミュニケーションの場に新たに使用可能な(認識|概念)を持ち込むことであり、一つの抽象的な認識機能を創造したことである。また言語とは、コミュニケーションの場から創造されたものであり、本源的にはコミュニケーションに先立つものではないし、思考に先立つものでもない。コミュニケーションがなければ通常、言語といわれているような言語はありえない。(例、狼に育てられた野生児は当然のことながら言語を使うことができず、人間に引き取られてからも言葉を覚えなかった。)

要約、感情機能がコミュニケーションの場に意義(目的に対する意志)を持ち込むのに対し、思考機能は意味を持ち込む。このようにしてそれ自体、直接的最終的目的ではない、様々の意義(階層的)づけられた行為、会話がその意味(階層的)によってなされる。

付記、言語の概念、例、善、美、の意味もその端緒、あるいは最終的根拠には感情機能の意義付けがあって始めて成立している。

上記の考察を総括して、上記の文脈のうちで思考機能、感情機能の判断の方向の違い、或いはそれによってつくられる認識の性質の違いを試みに列举する。

思考機能—操作、使用方法、意味、真、手段

感情機能—欲求、使用目的、意義、善、目的

またそれぞれの機能による文化的創造物をその重点によって区分してみる。

思考機能—論理学、数学、物理学、生物学、等のいわゆる科学一般。これらは下記に比較してその操作的思考とそのもたらす認識による「真偽」の合意に重点がある。

感情機能—宗教、芸術、政治、経済、等。これらはその欲求的感情と、そのもたらす認識による善、美、益、(快)等の「価値」の合意に重点がある。

また、これら思考機能、感情機能による文化的産物は、当然その一方の機能による独立の産物なのではなく、相互の連携による産物なのであるが、その発生の根底にある判断の性質に留意するなら、その重点のおかれかたによって、このような暫定的分類も可能となるだろう。(幾何学における重心のようなものである。)

3・感情を加えた認識の全体的構造

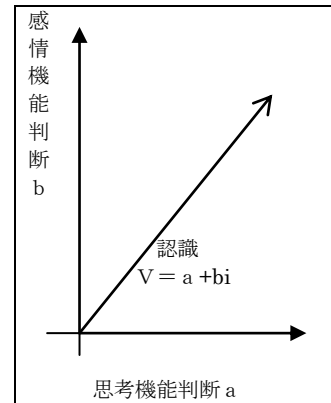
最初の認識は感覚機能により、それが判断機能（感情機能・思考機能）に分化して、その判断機能は感覚機能によって得られた自己の認識を判断する。

また判断は、思考機能と感情機能の合成になる。

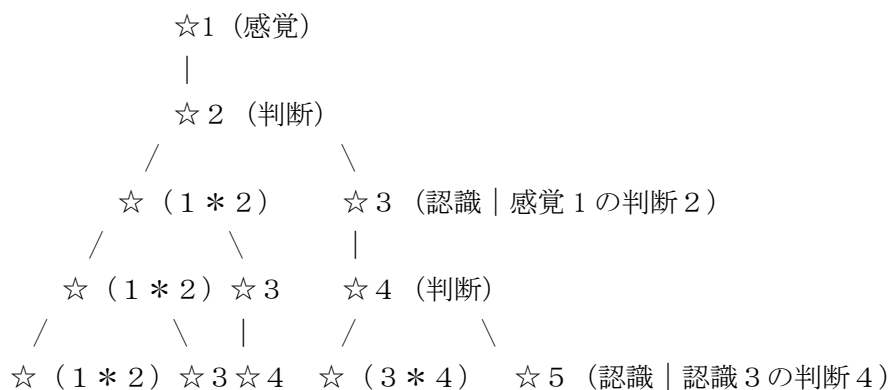
言語式としての表現を試みれば次のようになる。

- 1（認識 | 感覚機能による）＊2（判断）
- ＊ 3（認識 | 認識1の判断2）＊4（判断）
- ＊ 5（認識 | 認識3の判断4）……

また、例えば4の判断はその対象として3の認識を持つが、3の認識は1の認識と2の判断を含むので、4の判断はそれ以下の1、2、3、全てのレベルを対象とすることができ、そのことによって高次の判断はそれ以下の低次の判断を判断することができる。そしてまた高次の判断はその材料として低次の認識をよりどころとしているが、感覚機能も常に働いているため、これらの全体は輪唱様の構造となる。



あるいはまた、この輪唱様の認識の発達の量的な全体像をとらえれば、生物の繁殖にみられるフィボナッチ数列をモデルとしても定式化し得る。



ここで、より包括的な見地から「認識」を再確認する為に考察の手法を変えて、その構造と焦点を示すことを試みよう。すなわち、環境の全体像（情報の全体像）とその中における人間の存在（情報を処理する、つまり認識する主体）

を図示する。ここまでの考察の手法が、認識主体（乳児）を出発点としてその認識機能の発展、展開を時系列的につまり発生的に考察したのに対し、ここでの考察はそれとは逆に情報的な環境の全体像を描き出し、そこから今、問題としている認識主体の位置を焦点として示そうとするものである。つまり、単純に言えば先の考察の手法が「認識機能の発展の動き」を内部から発生的に追ったのに対し、ここではその「認識主体の占める位置」を

神（在らしめるもの）

↓

(神アニズム)	……	(社会)	……	(感覚)	…	(意志)	…	(理性)	……	(法則)
自然		環境		身体		感情		思考		神
↖ ↘		/ \		/ \		/ \		/ \		↗ ↙
集合無意識 2	……	集合無意識 1	……	無意識	……	意識	……	超自我		
		(他者)				(自我)		(魂)		

また、1で考察した認識世界に、感情という側面を加えて考察することは、新たに快不快(身体・感情)の一次元を導入した3次元の認識世界を考えることになる。以下に図示する。

個人的生存条件の判断である好き嫌いの判断は、その能動的操作による抽象性を更に高めることによって、共同体全体の生存条件にかかわる、善悪の判断にレベルをあげる。

能動的操作による抽象的
判断

精神的領域

悪
善
嫌
好
不快
快

受動的機能による
具体的感覚

身体的領域

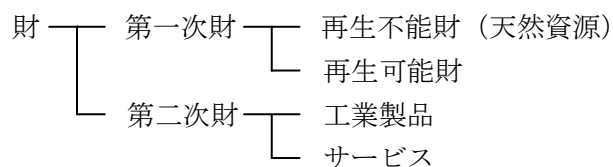
要約、個体の基本的な生存条件にかかわる、身体レベルでの快不快の判断が

好き嫌いの感情機能に成長し、それがやがて、その判断の能動的操作によって抽象度を高め、自己をはなれて共同体の生存条件にかかわる判断に発展したものが善悪の判断である。つまり、善悪の判断は共同体全体にとっての生存条件にかかわる快不快の判断とも言い換えられる。

4・結論

これまでの考察によって現代における最大の共同体のみならず我々の全ての子孫、すなわち未来の人類全体を含めての生存条件の根幹にかかわる最大の不快は環境破壊—環境汚染、エネルギー問題等—である。よってこれの解決が現代における最大の善である。よってまた環境・エネルギー問題解決は定言命法でもある。

この問題において経済学的見地からE・F・シューマッハーの財に関する次の定義を重要なものとして挙げておく。



この財の分析的定義は経済学の中で最も熟考された定義であろう。労働を価値の源泉とみなした経済学の祖アダム・スミスはその著『国富論』の中で次のようにいう。

「世界のあらゆる富は、金によってでも銀によってでもなく、労働によって、もともと〔自然の中から〕購買されたのであって、それを所有していて、なにかべつの生産物と交換したい人々にとって、その価値は、それがかれらに購買または支配させうる労働の量に正確に等しい」

これでは、我々が天然資源を採集する場合、我々が共有財産としての天然資源に払う代価はその採取にかかる労働だけでよいということにならないだろうか？ここには天然資源を人類の共有財産とみなす視点が欠けているのではないか？これは、酷い言い方をすれば自然に対する強奪を可とするような思想であって、そこには人類の共有財産という考えも、また自然に対する感謝も欠けていると解釈される余地がある。これに比して天然資源そのものに再生不能財という定義をあたえ、それに、採集するにあたってかかる我々の労働力を超えた価値を認めるシューマッハーの定義は一層深いものと言い得るだろう。

しかしまた、アダム・スミスは人間の経済活動の本質に関して瞠目すべき見解をも表している。すなわち人間は「神の見えざる手」によって騙されつつ経済活動をおこなっているのだと言うのだ。それはアダム・スミスの研究者、水田洋によれば次のことを意味する。

「じっさいの幸福はささやかな量の生活資料があれば達成されるのだが、目的（幸福）と手段（生活資料）の関係が、自然の欺瞞によって転倒されると、手段である蓄積が無限に追及される。手段が手段として、すなわち、目的の達成に必要なかぎりでもとめられる場

合には、限度があるけれども、手段の蓄積自体が目的になれば、蓄積の量は無限になるだろう。他人との競争が、それに拍車をかける。」『アダム・スミス』

そこで労働における人間の「疎外」ということが問題となるわけだが、これに着目したK・マルクスは賃金奴隷の状態を脱した「能力に応じて働き、必要に応じて分配される」真性の社会主義、すなわち共産主義の達成のほか、この事態の解決の見込みはないと主張する。しかしのちに実際に実現した社会主義国家の官僚制の強大化を目にしたマックス・ウェーバーはこう言う。理想を実現するに値する社会主義は消費者社会主義だけであると。これはつまり市場原理の貫徹による消費者独裁の形態をとることが意味され、これは同時に経済における市場原理の貫徹を意味することになるだろう。

これまでになされた善の定義から、この見地よりの経済政策の徹底が期待される。

また現在、各国別に保有されている軍備、流通されている通貨も地球^{ほし}の利益の為にはいずれば一つに統合されねばならないだろう。ここに世界は警察としての唯一の軍隊、価値評価の体系としての唯一の通貨をもつにいたる。ここに世界は完成し、地球^{ほし}の歴史は新たな段階を迎える。

この完成された世界ではその多様な宗教も唯一の真理を求める形式的に多様なものとして、相互に祝福されるものとなろう。相互に祝福を与えることこそ宗教における統一である。宗教においては神は多様な道を用意されたのだ。そこでは科学ですらその真摯なる姿勢において信仰たりうる。労働もまたその奉仕の精神によって信心行の資格をもち、人の為すあらゆる活動は敬虔なものとなりその業は神的なものを世界にもたらすであろう。各人はその愛するところの道を進むことができるのだ。われわれはこれを神に感謝しなければならない。

ただし此处で付言するならば、勿論、神が創られたものである以上、現在においても過去においても世は完成されていたと言い得る。

世には絶対的な次元と相対的な次元がある。絶対的、根源的、存在論的次元においてはたとえ戦争や貧困、犯罪などがあるとも世には欠けたところなく、それは全的に完璧なる世界である。この次元においては人もまた完全に平等であり、人は魂の次元で存在する。あらゆる出来事は人の魂を向上させる手段としてのみ生起する仮象にすぎない。「善悪」は相対的、表層的、現象的な次元において成立し、神は我々が自己や社会を高めるべく、我々をこの次元においた。我々の生存の目的とはこの次元における御心の成就である。

5・補遺・認識の確実性

この論文にはもともとは主観客観の問題から認識の確実性を5段階に分割した認識の確実性という項目がありました。古典的な主観と客観の一致という問題の解決、すなわち真理の真理たる基準の設定を階層的に確定することを目的としたものでした。しかしながら、私は後に次のことに気づくに及びその考察を断念したものであります。すなわち、絶対確実に一点の疑問の余地なく真理であることは、古くデカルトが述べたように「我思う、ゆえに我在り。」ということだけであること。すなわちデカルトはまったく正しく、主観と客観の一致の厳密な証明は不可能であることを見抜いた最初の人物であり、主客の問題に必

要とされるのは証明ではなく信仰であることを認識論の始まりにおいて明言したのです。そもそも主観も客観もそれが存在すると言う点においては帰を一にするものであり、デカルトのたてる神とはそれら存在を創造した創造主です。つまりデカルトの神は単に認識やその対象として還元されるような存在ではなく超越的存在であり、そのような神なき認識論において確実性を問題とする局面はちょうど宇宙のブラックホールのように、そこからの意識の一切の離脱を不可能とするものであります。

しかしながら、主観（認識世界）と客観（現実世界）の一点の疑問の余地もない絶対確実な一致の要請そのものを禁じた以下の考察はその方法がユニークであるためここに付記しておきます。

現実世界 c / 認識方法 a = 認識世界 b

現実世界 c = 認識方法 a * 認識世界 b

$\lim_{a \rightarrow 0}$ 認識方法 a

$a \rightarrow 0$

以上の道具立てをもとに、数学において 0 による除法が禁止されている理由に相当するものとして、客観（現実世界）に対する不可知論と独断論を禁じたものです。先ず微積分では a が小さければ小さいほど正確な値が得られることを念頭においておきます。

さて、

c/a において c が 0 であれば $a/b=0$ であり $a=0$ ならば b の値は何でも良い。=不定(認識世界は主観のまま何でも良い=独断論)

c が 0 でなければ $a=0$ において $a/b \neq 0$ なる b はありえない。

=不能（認識世界は成立しない=不可知論）

よって $\lim_{a \rightarrow 0}$ 認識方法 a は可能であるが、 $a=0$ （完全なる認識方法）を考え

$a \rightarrow 0$

ることは方法論的に禁止されるべきである。

6・解説

本論文の基本的なアイデアは画期的なものではあるが、またいたってシンプルなものでもある。ここにそれを記すことによって理解の一助としたい。

従来の倫理学史では、常に過去の哲学者が残した命題や、あるいは聖書などの宗教書から題材をとり、それらから善の定義を構成することが伝統とされていたが、私は過去の倫理学史には拘泥せず、もっと自然主義的に善の定義を行うこととした。[しかしながらこの小論では神の存在が結論ではなく前提として挙げられていることには注意されたい。]

その基本的なアイデアとは次のようなものである。

先ず生き物にはいろいろなものがあって、そのうちには蛇のように単独で生きるものから猿のように群れをなして生きるものまで様々である。そこで私はこう考えてみた。すなわち蛇のように単独で生きる生物には善悪の基準は（もしあるとして話をすすめるなら）それは、単体の生存にのみ関わる快不快であろう。しかる後、猿のように群れをなす生物では群れ全体の生存に関わる快不快があると言ってよいだろう。この群れ全体にとっての快不快（すなわち秩序）

が人間社会における善悪の判断の萌芽であるのではないだろうか。このように相互関係からなる、群れ（共同体）全体にとっての快不快の判断が善悪の基礎となる。その意味で私の考察は倫理基礎論である。

さらに加えて善悪の質に考察を進める。群れ全体（共同体全体）にとっての快不快の判断はその共同体の規模を異にすることによって、その質に高低の差が生まれる。家族の善は家族と言う限界を受けるし、部族、国家においても同様である。善悪の判断はその規模を大きくすることによって、その判断の抽象性を増すことになる。今現在考えられる最大の共同体とは、未来の人類全体をも含めた通時的人類であろう。その見地から考えたとき環境問題は通時的人類全体にとっての不快そのものである。よってこれを解決へ導くことがもっとも抽象性の高い最大の善となる。この考察によって本論文は環境問題の倫理学的基礎付けともなる。

また、哲学史上初めて通時的人類にとっての善を明らかにしたことにより、本論文はこれまで歴史をつうじて倫理学が目指してきたものに対し、一つの解答を与えるものになるう。

美の詩

帰郷

1・1

わたしはかつて考えた。神は人間の創作であると。
人は信じることによって慰みを見出し、己の弱さを偽るのであると。
また、ありもしない権威を笠にきて、己の利益を立てるのであると。
わたしは彼らを哀れにおもい、彼らの道を歩まなかった。
わたしは認識を頼りとし、実存をこととして歩んだ。
かつてデカルトは言った「我思うゆえに我あり」と。
わたしもまた彼の道に歩み、また、ヘラクレイトスとともに宣言しよう。
「人間が万物の尺度である。在るものには在るといふことの、在らぬものには在らぬといふことの」
わたしは諸学に学び、ついには学そのものについて思いをはせた。
「しかし、認識とは如何なるものか、実存は何処から来て何処へゆくのか」

1・2

わたしは真理を究めうるのか？また何ゆえに真理を求める？
わたしの知りえたことがどうして真理だと判定できよう？誰がそれを保証してくれるのか。
わたしの希求に何の意味があろうか？誰がそれを認めてくれよう。
アインシュタインの言葉に聞く
「宇宙で一番不思議なことは、我々に宇宙が理解できるということである」
ユングの言葉に聞く
「われわれの存在は深い意味で宇宙生成の愛の犠牲なのである」
今、わたしは学んで思う。
この秩序ある宇宙が、この玄妙極まる生命が、また認識可能なる偉大な理性が、
全てが気まぐれな偶然に過ぎないと言うのか？
私はハイデガーとともに立ち止まる。「何故、一体、存在者があるのであって、むしろ無があるのではないのか…」
わたしは愚かなことを信じていたのだろう。
すなわち創造主は無いということ。
「神は在る」または「神は無い」
この二つのうち、いったいどちらが不合理だろう。
わたしは道の終わりに思う。
無神論からの出発を用意されたのは主であると。
ニーチェを通じて言い給う「すべての良いものは回り道をしてその目標に近づく」と。
神は在る。
世の初めから言われているではないか。「告げよ、私は在りて在るものである」と。
わたしはこのすばらしき旅を振り返って、主に限りない感謝の祈りを捧げる。

1・3

主よ、あなたの真理はわたしの口に蜜の甘さよりなお甘い。
ドイツの諺に言わないだろうか「最高の調理人は空腹である」と。
主よ、あなたの真理はわたしには砂漠における水である。
今や歓喜に満ち溢れて、わたしの渇きは癒された。
その昔、アブラハムがイサクを捧げたように、わたしもすべてを捧げよう。
主よ、わたしは貧しく息子もない。しかし、イエスに倣って言うことが出来る。
「主よ、我が意のままを成さんとあらず、汝の御心のままを成し給え。」と
また、あなたがアウシュビッツで試みられたフランクフルに倣って言うことが出来る。
「人生に何かを期待するのは間違っている。人生があなたに期待しているのだ」と。
また、ヒンドゥーに倣って言おう。「わたしのアートマンよ目覚めよ。今やわたしはブラフマンだ」
真にタオイストの言うがごとく「彼は自己を忘れて、自分自身を発見する。」
もはや、わたしの人生はわたしの所有ではなく、わたしの命も主の所有だ。
主よ、わたしも一人のムスリム（絶対帰依者）でありたい。願わくばこの燔祭をうけ給へ。
わたしは自分自身を捧げる。

1・4

主よ、極東の島のこのわたしは、アブラハムの末だろうか。わたしはこれをいぶかしむ。
しかし、ホセアの書ではこう言われた
「わたしは彼をわがためにこの地に蒔き、憐れまぬ者を憐れみ、わが民でない者にわが民
と言ひ、彼もまたわが神よと言うであろう」
真にパウロも言うが如く、主が唯一の主であるならば、主は異邦人の主でもあり、天地一
切は主のものである。接ぎ木は為さるとわたしは信じる。
主は御自身の御名を在りて在るものと示された。真に存在の一切は主の顕現であり、主は
宇宙の御心である。ならば地上のすべての民はみな主のものではないだろうか。
仏教徒は密教にしてこれを知り、大日如来とこれを名づく。
しかるに、ユダヤの民は選ばれて世の初めから示されたる。真にイスラエルは誉なるかな。
「在りて、在るもの、一切の存在。」
真に天地一切、神の声かな。神道の徒は一切の存在を八百万の神と慕う。
「西も東もアッラーのもの」
真に宗教は多であるが、主なる神は一である。

回顧

2・1

かつてわたしは、ひょっとすると正しくも、つぎのようにいったことがある。「以前の文化
は、瓦礫の山となり、ついには灰の山となるだろう。しかし灰の山の上には精霊が漂って
いるだろう」
ヴィトゲンシュタイン

主よ、巷には日々の情報が溢れ、人々はまるで歴史の存在しないかの如く生活に追われている。先の二度の大戦すら深く顧みられることはない。

主は、エレミア書でいわれたのではなかったか

「それゆえ見よ、もはや、イスラエルの子らをエジプトの地から導き上ったヤハウエは生く、とはいわれない日が来る—とヤハウエは言われる—そうではなくて、イスラエルの子らを北の地と、彼らを追いやった総ての地から導き上ったヤハウエは生き給う、といわれるであろう。わたしはその先祖達にわたしが与えた土地に彼らを導き返すであろう」と。世に神を伝えたこの民は、大戦の末、贖われたのではなかったか。しかし、わたしは知らないそれを語る者を。

世界史とは普遍的精神の展開であり現実化であると説いたヘーゲルは偉大な先哲ではなかったか。しかるに人は世界を動かすものを知らない。

2・2

「あなたがたは言う、よい目的は戦争をさえ神聖にする、と。わたしはあなたがたに言う。よい戦争はあらゆる目的を神聖にする、と。」この旗印のもとにゲルマン人は言つてのけた「偉大なる者はすべて、嵐の中に立つ」と。しかしそれは殺戮であった。

極東のアジア人が西欧に挑みかかった「万世一系の天皇をいただく神国日本、八紘一宇の大東亜共栄圏よ成れ！」彼ら神風の兵は御国のためにと散っていった。

原子爆弾が完成する中、ただインドの聖賢だけがこう言った。

「平和への道はない、平和が道である」と。

国々の狂気は国々を滅ぼし、その灰の中から“世界”という名の希望の鳥を羽ばたかせた。国々〔リヴァイアサン〕の戦いから、国際連合が誕生した。

.....

ヴィトゲンシュタインは言う「ある時代は、ほかの時代を誤解する。ある小さな時代は、独特のみにくいやり方で、ほかのすべての時代を誤解する」と。

この時代は終末の開始ではなかったのか、すべては主の御手によるものではなかったか。

「斧がそれを振るう者に対して自分を誇り、のこぎりがそれを使う者に向かって高ぶることができようか。それは、鞭が自分を振り上げる者を動かし、杖が木でない者を持ち上げようとするに等しい。」理性の狡知とはまさにこれである。

終末の開始とは普遍的精神の完成の序曲であったのだ。主は世界を刈取られようとなさっている。

主は北スコットランドのアイリーンに啓示を下してこう言われる。

「すべてが光となるためには、先ず闇であるものすべてが取り払われなければなりません。闇が表に出され、姿を現して、そのあるがままをさらけ出さない限り、それを取り除くこともできません。光の下では、闇は何の力ももたず、いずれ無のなかへと消え去っていくでしょう。闇が表に出てきていることに感謝しなければならないのです。すべてはうまくいっています、とわたしがいうとき、表面上はどう見えようとも、そのとおりだと心の底から信じなさい。」

新世紀

3・1

最後の壁であった東西の壁が崩れた。唯物論の論理は背理法であった。

「神の見えざる手」市場の力は勝利した。

新たなる繁栄よ、主の恵みよ来るか。しかし、今なお、世は主の勝利を語らず、その口は愚かなことを語る。曰く、資本主義は勝利した、と。

主よ、世人はあなたを知るにはあまりに愚かであり、その恵みを受けるには余りに驕慢である。彼らの目を開く強い日の光を与え給へ。

真に彼らは義の為でなく、覇の為に戦い。繁栄の為でなく、欲望の為に取引をする。

しかし、彼らも永くは立たない。主は彼らを、己のふさわしきにしたがって利用し給うから。「斧がそれを振るう者に対して自分を誇り、のこぎりがそれを使う者に向かって高ぶることができるようか」

か

彼らはそれにふさわしき、鉄の杖をもって牧う牧人へと渡されるべきである。そしてその牧人をさらに牧うのは、主よ、あなたである。

「わたしに求めよ、わたしは民らを嗣業として地の果てを所有として君に与える。君は彼

こぼ

らを鉄の杖をもって牧い陶工の器のようにかれらを壊つ」

彼は普遍的精神を具現した者であり、その普遍的精神をもって民を教育する者となるだろう。彼は定言命法を命ずる。「汝の意志の格律が、つねに普遍的立法として妥当しうるように行為せよ」と。

3・2

わたしもまた、美の詩を現し、この詩を詩おう。主の収穫には「百の砥鎌」が必要である。

わたしもまた己の鎌を砥ぐ者であり、主に捧げつつ祝う者だ。

わたしの愛する詩人が言った「詩人は嘘をつきすぎる」と。

しかし、耳のある者は聞くがよい、この詩人の書く詩は真であった。

また、美に捧げた先哲が来るべき世を予見して言う。「すでに神話が啓蒙であり、啓蒙は神話に退化する」と。わたしも今、美に捧げつつこの予言に倣おう。愚かな羊よ、美を笑うな、もし美を笑えば主に逆らう。美は主の力ゆえ畏るべきなり。汝の真を尽くして美を畏れよ、美の門もまた主への道であるから。

おきて

ひる

「あざける者と座を同じくせぬ、その人に幸あれ。それはヤハウエの律法を悦び日も夜もその律法を想う人」

いにしえ

古から「主に立てた誓いは必ず果たせ」と言われている。わたしは主に捧げる本稿にて美を扱うを約束した。美に対して立てられた誓いには今、美をもってこれに報いよう。来るべき世界もまた、美しく彩られることを祈って。

「見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。

先の事は思い出されず、心に上ることもない。
だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。
見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。
わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。
そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。
そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もいない。
百歳で死ぬものは若かったとされ、百歳にならないで死ぬものは、のろわれた者とされる。
彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作って、その実をたべる。
彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。
わたしの民の寿命は、木の寿命にひとしく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。
彼らはむだに労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。
その子孫は彼らとともにいるからだ。
彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、
彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。
狼と羊は共に草をはみ、
獅子は牛のように、わらを食べ、
蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいてもそこなわれることなく、滅ぼされることもない。」と主は仰せられる。

イザヤ．65

笑話―隠されたる神―

「もし神があるのなら何故もっとはっきり知られないのか？」

これがある人々の主張である。また、もしあるのなら「何故こんなに世には悪がはびこっているのか」これがまた、他の人々の主張である。

中にはもっと切実な告白もある。「わたしは不条理な絶対絶望の中で、ひたすら神に祈りを捧げたが報いられることはなかった…わたしは断言するこの世に神などいない」と。

ゆえにサルトルなどはこう言う「最高の冗句を聞かせよう。つまり神など存在しないのだ」と。

わたしのみるところ、サルトルのこの言はそのままでは冗句になっていない。

しかし、これを言わせているのがもし神であれば、それはウィットに富んだ冗句となるだろう。

「もし神があるならば何故もっとはっきり知られないのか？」

わたしの感性は、神とはそんなにはっきりとは知られてはならないものだとなしに告げる。神は隠されたる神である。

「まことにあなたは御自分を隠される神、イスラエルの神よ、あなたは救いを与えられる」

イザヤ． 45-15

つまりわたしの神学とはこうだ。

「隠されたる神とかけて、ミニスカートの中身ととく！

〔そのころは？〕

見えるのもダメ！見えないのもダメ！

そのチラリズムこそ、神の醍醐味！

神の存在証明

公理 1 : 私は考えたり、感じたりする。よって考えたり感じたりする私は存在する。

公理 2 : 存在する私を内包するような場が存在しなければならない。よって宇宙は存在する。

公理 3 : あらゆるものには原因がある。

公理 4 : 創造者はその創造物より優れている。

定理 : 公理 1, 2, 3, 4 より、人格的であり、また全ての自然の秩序をつかさどる創造者、第一原因である神が存在する。

FACE ONE'S MAKER ―後代へ―

遠い昔から宇宙が存在してきた。そして、その中からこの一つの惑星、地球が生まれ存在してきた。やがて我々人類が、生まれ、立ち、歩みを続けてきた。

人は何故、何故と問うのだろう。古来、人類は様々な問いを発してきた。そしてまた人類だけが問うのである。

我々の祖先、太古の人類が言葉の獲得によって発した最初の問いとは、いったい何だっただろう。今日に生きる我々には、ただ想像することしか残されていない。しかしやがて、我々の祖先は文字を発明した。これによって歴史が始まって以来、この発明は我々に、様々な先人の問いを保存してくれることにもなった。数千年たった今日でも、それによって我々は、先人の様々な問いを知ることができる。

さまざまな文明の神話は、世界創造の起源とそのゆくすえ、人類の起源とその運命のゆくすえを語る。神話は大地の果てには何があるのかを教えてくれた。人間はどうして死なねばならないのかを教えてくれた。今沈んだ太陽は明日もまた昇るか？死んだ人間はどこへゆくのか？その他、様々な疑問の全てに、神話はいつでも答えてくれた。これら神話の語ること全ては、みな祖先の発した問いへの答えとなるものであった。

我々は、祖先の問いを知ることによって、何を知るだろうか。あのいつでも答えてくれた神話から祖先が受け取っていたものを今、我々は持っているだろうか。我々は今、科学の時代に生きている。しかし、やはりその科学も人類の真摯な問いかけへの神の答えであって、この宇宙を創造した神は今も変わらず真摯なる者を通じて我々のことを導いているのだ。

今や我々が再び神を見いだすべき時が来た。我々は新しい神話を持たねばならない。我々が問えば神はそれを与えてくれるだろう。敬神の徒にとって世界は神によって書かれた開かれた一冊の書物である。その真理の泉は尽きることがない。そして、我々は再び神とともに生きるのだ。

私は、この小論をもってささやかな人類への贈り物としたい。私の存在もまた、有名無名の無数の先人たちの、悲喜こもごもの人生の大河に負っているのだから。

後の世代のために

このことは書き記さなければならない。

「主を賛美するために民は創造された。」

『詩篇』

あとがき（統合失調症からの回復）

本書は私の学生時代から十数年をかけての哲学的思索から生まれた一著であるが、その間、著者は統合失調症を発病し、その闘病生活の中から生まれ出た新たな知恵が深い影響を与え、当初、筆者が持っていた思想とは大きく異なるものとなった。その新たな知恵とは神の存在に対する確信、つまりは普通言われる信仰をもったということである。この一事が私の人生の転機となり、哲学の転機となり、また病状からの回復の転機となった。この本はその転機の直後に書かれたものなので、当初の演繹的な論理構成を残してはいるが、この本で私が最も主張したい命題は内容のごとく難解なものではない。

それはつまるところ次の一事に尽きる、『神は存在する』。この一事だけを主張するために、実のところこのような難解な形式は必要とされないだろうというのが今、振り返って思うところである。

実際、神の存在をさえ確信することが出来れば、人生はどれほど単純なものになることだろう。あなたは病の床にあるとき、神に祈ればよい。人生の悩みに苦しんだとき、神に慰めを請えばよい。難しい判断を迫られたとき、何が正しいかを考えればさまざまな迷いが生ずる。そのような時に、『わたしの判断が何であれ、神の喜ばれるものであるように。』常日頃、ひとり静かな時にそのように思索する習慣さえついていれば、判断に迷うことも少なくなる。

これが日常生活で出来るようになるためには神の存在を心から確信していなくてはならない。そして更にはそうした生活を楽しめるようにならなければならない。そうすれば無用のストレスとも縁が切れるというものだ。

本書はかなり難解に書かれたとは言え、これもまた、私が神の存在を確信したがための恩寵の賜物でもある。本書の記述は限りなく厳密である。神は願えば、知恵をさえ与えてくださる。『知恵の始めに知恵を得よ、主を畏れることこれが知恵である』。またさらに神は、知恵を得るために努力する力さえ与えてくださる。そうすればあなたには限界というものもなくなる。こうして私は自分の哲学を完成させることができ、統合失調症からも回復することができたのだ。

最後に、なるほど私は罪深い人間であって、とても本を出版できるような高尚な人物ではないが、キリストの贖いによってこの本が出版できたということを、今、私は信じている。またそれを支えてくれたNPO法人ウェンディの諸兄にも友愛と感謝の気持ちを込めて、本書が何らかの形でより多くの人を益することが出来ますように。

注：天主様

広辞苑で天主という語を引くと、

①（ラテン語で **DEUS** の漢訳という）キリスト教で、天にいます神。上帝。天帝。

②〔仏〕諸天（神々）の主。主に帝釈天についていう。

と掲載されている。

私の考えでは古の国語学者が渡来の最高神の概念を、古事記、日本書紀に登場する日本神話の最高神、天御中主神から天と主という語を借用して天主という日本語訳にしたものであろうと思われる。

ヘブライ語ではヤハウエのことを直接発音することは非礼にあたるという考えからアドナイ（主）と読み替えるのが普通である。また聖書にも主と訳してある。

私は神社に参るときも、お寺に参るときも、教会で祈るときも“天主様”と祈る。

私にとっては神は唯一の存在でさまざまの呼び名（シニファン）があるだけで実態（シニフェ）は同じものであるというのがここで述べられた私の哲学である。まことにコーランにあるがごとく「すべての美名はアッラーのもの」である。（アラビア語のアッラーは英語に訳すと **The God** という意味である。）

特にことわっておかなければならないのは別に私は“天主教”などというあたらしい宗教をつくろうなどという目論見はまったくないことである。

それに天主教とは日本で言えば、カトリックの古い呼び名でもある。

天主様ありがとうございます。これがいつもの私の祈りである。

シェヒナー

神の臨在

著者：中西 克徳

ホームページ <http://www.wendy21.jp/member/yhwh/>

『在るところの者』

2003 年 12 月 1 日 初版発行
2007 年 4 月 1 日 改定第 2 版第 1 刷

発行 NPO 法人ウエンディ

印刷・製本 作業所ウエンディ本部
福岡県北九州市門司区緑ヶ丘 10-19 〒800-0043

電話・ファックス (093) 391-2167
E-MAIL wendy@f2.dion.ne.jp

郵便振替 01790-5-117278

特定非営利活動法人 ウエンディ

<http://www.wendy21.jp>

※落丁本・乱丁本は、小社までお送り下さい。送料は小社負担にてお取替えます。

©KATSUNORI NAKANISI, Wendy21 2007

Printed in Japan

ISBN4-903218-05-8 C1010